

都留市埋蔵文化財報告第7集

中央自動車道富士吉田線四車線工事に伴う

堀之内原遺跡発掘調査報告書

1980.3

都留市教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

都留市埋蔵文化財報告第7集

中央自動車道富士吉田線四車線工事に伴う

堀之内原遺跡発掘調査報告書

都留市教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

序

都留市教育委員会

教育長 内藤盈成

本調査は日本道路公団東京第二建設局と、都留市教育委員会との委託契約にもとづく、中央自動車道富士吉田線の四車線化工事計画に伴う堀之内原遺跡の調査であります。

本調査の必要性は先に発行した昭和48年の「中谷遺跡」昭和51年「都留市の先史遺跡」又は昭和39年に調査済みの山梨県中央自動車道考古学調査団の報告書によって、つまびらかに発表されている事により立証されたものと推察いたします。本調査の成果は日本道路公団関係者の積極的ご援助と地区市民のおしみない労働力の協力と宿泊施設の提供にあったと思います。

特に本調査によって主体的市民団体である日本大学考古学研究会、都留文科大学考古学研究会の学生諸君と地域住民の共同作業を通しての人と人との交流の中に生きたる会話、老人と若者の楽しい親子的愛情の場を見せていただいた感銘は「ゆとりある教育」の真の姿を示したものと心から喜びとするものであります。

最後にこの貴重な報告書をもとに更に文化財の保護、発掘に精力的につとめ、文教都留市の確立に励むことをお誓いして、関係者への労をねぎらうお礼のご挨拶といたします。

例　　言

1. 本書は、昭和 53 年度に、日本道路公团東京第二建設局と、都留市教育委員会との、委託契約により実施した、中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う堀之内原遺跡の緊急調査報告書である。本書作成の委託契約は、昭和 54 年度に行なわれた。
2. 本調査の調査組織は、別に示すとおりである。
3. 本書の作成は、都留市教育委員会が行なった。執筆は、各遺構及びトレンチ出土の遺物についてのみ、担当者が作製した遺構カード・遺物カードをもとに奈良が加除筆して取りまとめた。尚、そのさい文末に各担当者名を記した。その他の執筆及び全体の編集は、奈良が行なった。
また、編集に際しては、青野恵子、片山雅文、宇佐美千里の協力を得た。
4. 遺物の実測・トレースは、奈良・喜多圭介・谷口栄が、遺構図トレースは、奈良・喜多・日向容子・大崎裕美・平佐枝子が、それぞれ行なった。又、土器の復元は、奥陰行先生にお願いした。
尚、遺物整理及び報告書作成にあたり、日本大学考古学研究会・都留文科大学考古学研究会の協力を得た。
5. 遺物及び実測図は、都留市教育委員会が保管している。
6. 発掘調査・報告書執筆において、特に次の方々から種々の御指導・御助言を賜わった。厚く御礼申し上げる。

坂本美夫・末木 健・田代 孝（県文化課）

河野喜映（神奈川県文化財保護課）

堀内 真（富士吉田市教育委員会）

調査組織

1. 調査主体者 都留市教育委員会
2. 調査担当者 奥 隆行（都留市文化財審議会委員）
奈良泰史（都留市教育委員会）
3. 調査員 河合仁志・喜多主介・横山典夫
4. 補助調査員 鈴木利幸・片山雅文・工藤信一郎・相良雅男・伊藤修二・宮野晴美・
山根則子・新藤恭子・守安幸代・宍戸美智子・平林 彰・伊藤正人・
日向容子・大崎裕美・平佐枝子・大野陽子（日本大学考古学研究会）
青野恵子・堀江 煉・落合佐敏・平本信雄・小幡哲明・野名すが子・
坂本礼子・有泉由美子・森下佳代子・石原喜恵子・室井裕子（都留文科大学考古学研究会）
5. 作業員 大久保修一・上高原 博・植田晶三・岸本伸二・岡 政幸・浦山芳清・
安藤畦人・武田茂行・沼本謙三（大学生）
日向照子・竹田明美・大野あい子・日向きよ子・山本ふく・小林志げ
子・清水一子・佐藤つる子・天野志げの・奥秋永良・城之内巨三・堀
野良元・平井きよ・城之内かづ子・清水ふさ子・堀野綾子・天野静江・
天野紀子・鈴木よし子（一般）

目 次

都留市教育委員会

教育長 内藤盈成

序

例 言

調査組織

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の環境	3
III. 発掘調査の経過	4
1. 概要	4
2. 日誌	4
IV. 発掘調査の結果	7
1. 層序	7
2. 遺構と遺物	8
(1) 第1号住居址と出土遺物	8
(2) 第2号住居址と出土遺物	12
(3) 第3号住居址と出土遺物	16
(4) 第4号住居址と出土遺物	21
(5) 第5号住居址と出土遺物	27
(6) 第6号住居址と出土遺物	29
(7) ピット群と出土遺物	32
(8) トレンチ出土の遺物	36
V. 発掘調査のまとめと若干の考察	39
1. 住居址について	39
2. 堀之内原遺跡出土の土師器について	39
(1) 編年的位置付けについて	39
(2) 地域的特色について	41
おわりに	43

挿図目次

第 1 図	堀之内原遺跡の位置	2	第 20 図	第 4 号住居址平面図	21
第 2 図	堀之内原遺跡付近地形図	6	第 21 図	" " (掘り方)	22
第 3 図	堀之内原遺跡全体図 (折込一①)		第 22 図	カマド	22
第 4 図	堀之内原遺跡標準土層図	7	第 23 図	出土土器 (1)	24
第 5 図	第 1 号住居址平面図	8	第 24 図	出土土器 (2)	25
第 6 図	" " (掘り方)	9	第 25 図	第 5 号住居址平面図	27
第 7 図	カマド	9	第 26 図	" " (掘り方)	28
第 8 図	出土鉄製品	10	第 27 図	カマド	28
第 9 図	出土土器 (1)	10	第 28 図	出土土器	29
第 10 図	出土土器 (2)	11	第 29 図	第 6 号住居址平面図	30
第 11 図	第 2 号住居址平面図	12	第 30 図	" " (掘り方)	30
第 12 図	" " (掘り方)	13	第 31 図	カマド	31
第 13 図	カマド	13	第 32 図	出土土器	31
第 14 図	出土鉄製品	14	第 33 図	ピット群全体図	33
第 15 図	出土土器	15	第 34 図	" 出土の石器	35
第 16 図	第 3 号住居址平面図	16	第 35 図	トレンチ出土の土器	37
第 17 図	カマド	17	第 36 図	石器	38
第 18 図	平面図 (掘り方)	17	第 37 図	堀之内原遺跡出土土器編年表・折込一②	
第 19 図	出土土器	19			

付表目次

第 1 表	第 1 号住居址出土土器一覧表	11
第 2 表	第 2 号住居址出土土器一覧表	14 * 16
第 3 表	第 3 号住居址出土土器一覧表	20
第 4 表	第 4 号住居址出土土器一覧表	23 * 26
第 5 表	第 5 号住居址出土土器一覧表	29
第 6 表	第 6 号住居址出土土器一覧表	32
第 7 表	ピット群出土・表採の石器一覧表	34
第 8 表	トレンチ出土の縄文式土器一覧表	36
第 9 表	住居址・トレンチ出土及び表採の石器一覧表	37
第 10 表	堀之内原遺跡住居址一覧表	39

図版目次

- 図版 1 (1) 堀之内原遺跡遠景(北西方向より)
(2) 堀之内原遺跡近景(南西方向より)
- 図版 2 (1) 堀之内原遺跡遠景(西方向より)
(2) 第1号住居址
- 図版 3 (1) 第1号住居址調査風景
(2) 第1号住居址カマド
- 図版 4 (1) 第2号住居址遺物出土状態
(2) " "
(3) " カマド
- 図版 5 (1) 第2号住居址
(2) " (掘り方)
- 図版 6 (1) 第3号住居址居址カマド
(2) 第3号住居址カマド(セクション)
(3) " " (掘り方)
- 図版 7 (1) 第3号住居址
(2) " (掘り方)
- 図版 8 (1) 第4号住居址遺物出土状態
(2) " 床面上集石
(3) " カマド
- 図版 9 (1) 第4号住居址
(2) " (掘り方)
- 図版 10 (1) 第5号住居址
(2) " カマド
(3) " "
- 図版 11 (1) 第5号住居址
(2) " (掘り方)
- 図版 12 (1) 第6号住居址遺物出土状態
(2) " カマド
(3) " カマド(掘り方)
- 図版 13 (1) 第6号住居址
(2) " (掘り方)
- 図版 14 (1) ピット群全景(北方向より)
(2) " (南東方向より)
- 図版 15 第1号・2号住居址出土遺物
- 図版 16 第3号・4号住居址出土遺物
- 図版 17 第3号～6号住居址出土遺物
- 図版 18 表様・ピット群出土の石器

I 調査に至る経緯

中央自動車道富士吉田線は、高井戸インターから河口湖インターに至る全長約 92.3 kmの高速道路である。本路線は、首都圏と富士山及び、富士五湖方面とを直結しているため、観光シーズンには大変に混雑する。さらに、現在、高井戸インターから大月ジャンクションまでの約 69.9 km は 4 車線であるのに、これより河口湖インターまでの約 22.4km は 2 車線という変則的なものとなっているため、事故があとを絶たない。そのため、ここ数年来、4 車線化早期実現への要望が高まっていた。

昭和 53 年 9 月、山梨県文化課より中央自動車道富士吉田線大月ジャンクションから河口湖インターまでの 4 車線化工事計画の連絡と、それに伴う都留市小形山地区の埋蔵文化財の照会があった。しかし、この時はすでに、同工事計画の第 1 期工事として実施される花咲トンネルの工事用道路建設を目前にひかえていた。

照会に基づき同地区踏査の結果、小形山字宮脇、同堀之内原において遺跡の存在が確認された。その後、県文化課と再度踏査したところ、官脇遺跡においては縄文時代の、堀之内原遺跡においては平安時代の、遺物がそれぞれ確認された。

そのため、これらの踏査結果を踏まえて、日本道路公团笛子トンネル工事事務所、県文化課、都留市教育委員会の三者で協議が行われた。その結果、官脇遺跡については、今回の工事用道路建設に当って、遺跡を破壊しないように工事を進める事、堀之内原遺跡については、保存が不可能なため、昭和 53 年度に当教育委員会が記録保存を目的として、日本道路公团東京第二建設局との委託契約によって、発掘調査を実施する事に決定した。

委託契約は、昭和 53 年 10 月 7 日に締結され、10 月 8 日調査を開始した。

(事務経過)

昭和 53 年 9 月 21 日 発掘届を文化庁へ提出。

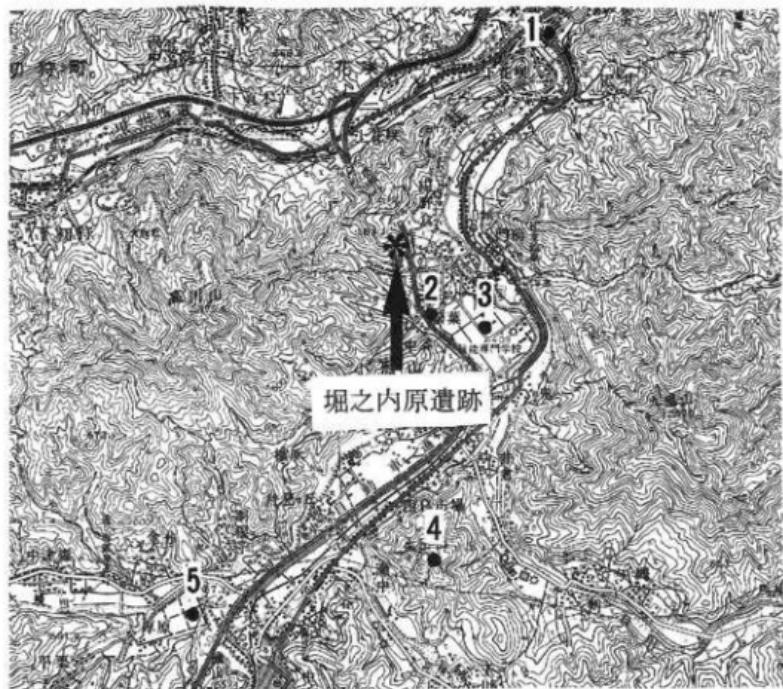
〃 9 月 26 日 昭和 53 年度文化財発掘計画の協議書が、日本道路公团笛子トンネル工事事務所より提出される。

〃 9 月 26 日 日本道路公团東京第二建設局へ計画書を提出。

〃 9 月 30 日 文化財保護法第 57 条の 3 の規定に基づく書類を道路公团より受けて文化庁へ提出。

〃 10 月 7 日 委託契約を締結。

昭和 54 年 1 月 24 日 昭和 53 年度埋蔵文化財発掘調査委託契約の精算書を日本道路公团東京第二建設局へ提出。



1. 大月遺跡
2. 中谷遺跡
3. 中溝遺跡
4. 生出山山頂遺跡
5. 牛石遺跡



第1図 堀之内原遺跡の位置

II 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と自然環境

中部山岳地帯の南東に位置する山梨県は、地形上、甲府盆地を中心とした富士川水系に属する地域と、相模川、多摩川両水系に属する山梨県東部の、二つの地域に大別され、関東山地から連なる御坂山地が、この二つの地域を隔てる分水嶺となっている。

山梨県東部域は、山間地で平坦地こそ少ないが、多摩川水系に属する丹波川、小菅川及び、相模川水系に属する桂川、道志川、秋山川の各流路には、河岸段丘が発達している。都留市内においても、柄杓流川、菅野川、朝日川、大幡川等の桂川の支流が流れ、各流域に河岸段丘が発達し、数多くの遺跡が立地している。

堀之内原遺跡は、都留市小形山字宮脇に所在し、西側に高川山を背にして、西から南へ緩やかなスロープを描く河岸段丘の上に立地している。遺跡の東側には、桂川がゆるく蛇行して北流している。

2. 遺跡の歴史的環境

山梨県東部において、土師器・須恵器を伴う古墳時代～平安時代の遺跡は、120ヶ所(1)を数え、主に桂川流域に分布している。その内、8世紀以前の遺跡は、河口湖周辺及び、桂川下流域においてわずかに認められるのみで、遺跡の大半は、8世紀以降のものである。都留市内においても、弥生時代以後、しばらく遺跡の空白時代が続き、8世紀を境に増加しはじめ、9世紀に入ると急増する状況がうかがわれる。

堀之内原遺跡も8世紀にはじまり、9世紀に増大するという、前述の様相を反映する遺跡の1つである。当遺跡の周辺には、南東約1.2kmに、縄文時代中期新道式の遺物及び住居址が検出された中溝遺跡(2)、南約0.8kmには、縄文時代晚期清水天王山式土器及び、有名な「耳飾を付けた土偶」が出土した中谷遺跡(3)がある。

又、北東約2.4kmに縄文時代中期曾利式期及び、真間式期の遺物、遺構が検出された大月遺跡(4)がある。

註 (1) 堀内 真 1979. 第14回都留考古学会学習会発表要旨

註 (2) 奥 隆行他 1974. 「中溝遺跡発掘調査報告」 都留市教育委員会

註 (3) 奥 隆行他 1973. 「中谷遺跡発掘調査報告」 都留市教育委員会

註 (4) 平松康毅他 1977. 「大月遺跡(1)一県立都留高等学校校舎改築に伴う第一次発掘調査報告」 山梨県教育委員会

III 発掘調査の経過

1. 概要

山梨県都留市堀之内原遺跡発掘調査は、昭和 53 年 10 月 5 日より、11 月 16 日まで延べ 43 日間に渡って実施した。

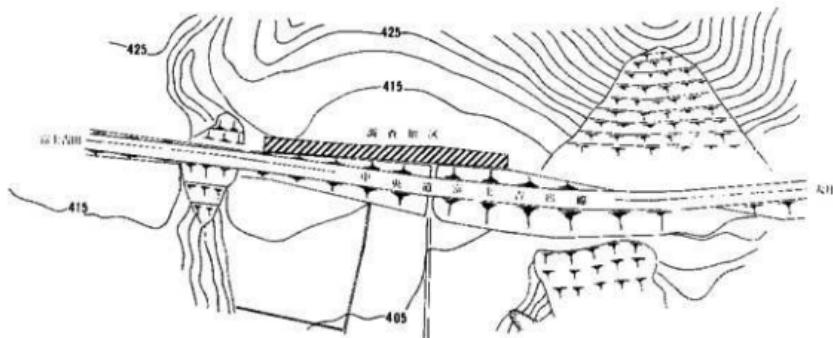
調査方法は、南北に 1~75、東西に A~H のグリッド ($2\text{m} \times 2\text{m}$) を設定した上で、A ライン、C ライン、E ラインに、 $2\text{m} \times 6\text{m}$ のトレンチ ($2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッド 3ヶ) を設定して、調査し、遺構に当たれば拡張し、当たらなければそのトレンチ調査を終了する、という方法をとった。

2. 日誌

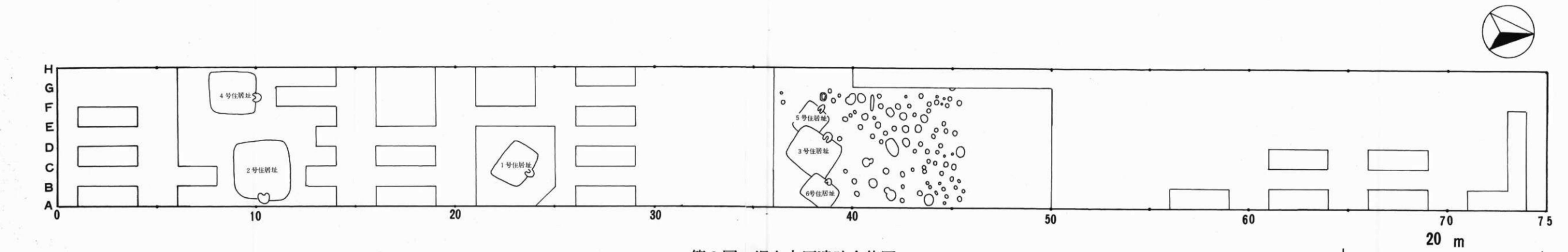
- 10 月 5 日 調査開始。器材の搬入と杭打ち（基本杭 = 10m 間隔）を行う。
- 10 月 6 日 基本杭をもとに 2 m 間隔で杭打ちを行う。中央道の路線沿いに南北に 1~75、東西に A~H のポイントを設定。
- 10 月 7 日 A-1~3、C-1~3、E-1~3、A-6~8、C-6~8、E-6~8、A-11~13 の計 7 トレンチの調査。いずれも第 2 層上面まで、C-1~3、E-1~3、A-11~13 では、土器片が出土。
- 10 月 8 日 昨日に引き続き、A-1~3、C-1~3、E-1~3、A-6~8 の各トレンチの調査を行はるほか、新たに、A-21~23、26~28、36~38、46~48 の 4 トレンチを調査。A-6~8 トレンチでは、-150cm 掘り下げる第 9 層まで確認し、出土遺物の多い A-36~38 では、第 IV 層上面までをサブトレンチによって確認した。
- 10 月 9 日 A-1~3、11~13、46~48 の調査を続けるほか、A-56~58、61~63、66~68 の各トレンチを新たに調査。本日までの調査の結果、第 I 層（黒褐色土）は北側ほど厚くなっている、遺跡の南北にあきらかな傾斜が認められた。
- 10 月 10 日 A-66~68 の他に、A-71~73、B-E-73、C-61~63、66~68 の 4 つのトレンチを調査。いずれも第 1 層が厚いため II 層上面までは至らず。出土遺物は物なし。
- 10 月 11 日 A-61~63、66~68、C-61~63、66~68 の各トレンチの調査を行う。C-61~63 の第 II 層上面で礫群らしきものを発見したほかは自立つ出土遺物なし。
- 10 月 13 日 C-21~23、C-11~13、C-36~38 の各トレンチの精査によって確認された落ち込みをもとに拡張し、それぞれ、第 1 号住居址 (A~D-21~24)、第 2 号住居址 (A~D-11~12)、第 3 号住居址 (C-36~38) と命名。
- 10 月 14 日 1 号、2 号住居址はプランを確認し、遺構調査に入る。サブトレンチにより床

- 面及び壁を確認。覆土は基本的には一層であり、黒褐色で黄褐色粒子、スコリア等を含有する。
- 10月15日 1号住居址は南側で床面及び壁を追う。土師器片多数出土。3号住居址は引き続き拡張とプラン確認の作業を行う。
- 10月16日 A～G-41～50地区では、A～E-43～45トレンチを調査。B-42において集石を発見。
- 10月18日 1号住居址は北東のカマド部分を残して全面精査を行う。A～G地区では、A～E-39～40を拡張。
- 10月19日 1号住居址は引き続き精査を行い、2号住居址では床面を確認。土師器・須恵器の破片多数出土。本日新たに、第4・5・6号住居址を確認、命名して調査に入る。4号住居址は2号住居址の西にあたり、5・6号住居址はいずれも3号住居址の西側・東側を切って構築されている。5・6号住居址は、床面・壁及び、カマド等を確認。
- 10月21日 1・2号住居址は精査を行い、覆土の堆積状態等を確認する。3号住居址は、F-36～38トレンチまで拡張し、プランを確認。又、ピットを6個検出する。4号住居址は東側を拡張しつつ堀り下げる、カマドを検出。
- 10月22日 1・2号住居址ではセクション図の作成、写真撮影を行ってベルトをはずす。1号住居址では各コーナーごとに1個ずつ、2号住居址では3個の柱穴を検出。3号住居址はセクションベルトを設定して、掘り下げる。
- 10月23日 1号住居址のエレベーション図を作成、写真撮影し、カマドの調査を行う。
- 10月24日 3号住居址のプラン、床面の確認作業を行う。
- 10月27日 2号住居址のカマドの調査を行う。同一個体（甕）と思われる土師器片が出土。
- 10月28日 5号住居址の床面を調査。覆土中で完形の壺が出土。6号住居址はセクションベルトを設定してサブトレンチにより床面と壁を確認。この住居址の床面には全域に渡って焼土が認められる。
- 10月30日 1号住居址はカマドを調査し、ほぼ終了する。6号住居址は床面の精査と壁面の確認を行う。完形と思われる須恵器が出土。
- 11月1日 2号住居址は床面精査の結果、7本のピット検出。写真撮影、平面図作成し、ほぼ終了する。
- 11月2日 3・5・6号住居址は、セクション図の作成後、ベルトをはずして、床面精査を行う。写真撮影、平面図の作成。
- 11月3日 3・5・6号住居址は、カマドを調査。4号住居址はプランを確認、セクションベルトを設定し掘り下げる。

- 11月4日 3・4・5号住居址は、写真撮影後、平面図、エレベーション図を作成し、ほぼ終了する。
- 11月5日 4号住居址は、セクションベルトを残して床面の精査を行う。住居址中央部において集石を検出。
- 11月6日 4号住居址は、セクション図作成後、セクションベルトを取りはずし、床面の精査を行う。
- 11月7日 昨日に引き続き、4号住居址の床面精査、周溝、ピット検出。床面より灰釉陶器出土。
- 11月8日 4号住居址はカマドを調査し、ほぼ終了する。
- 11月11日 ブルドーザーでG～H-36～42、F～H-42～48の第I層を削除した後、第III層まで掘り下げる。A～H-41～48でピット群を確認、調査する。
- 11月14日 前日の雨のため遺構が確認しにくくなつたので、全体の清掃とピット等の遺構確認及び調査を行う。
- 11月15日 ピットの検出、調査し、平面図の作成を平行して行う。又、集石と礎石ふうの疊のエレベーション図と平面図を作成する。
- 11月16日 ピット詳をすべて調査、実測。ピットは計136個検出された。本日をもって調査を終了し、器材等の整理を行う。



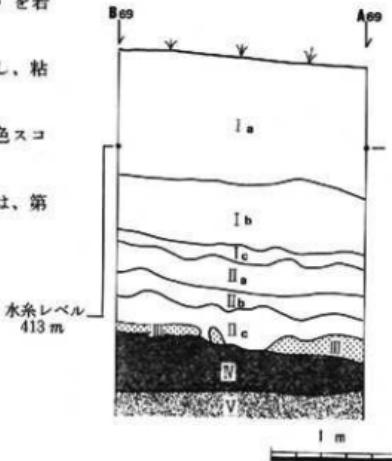
第2図 堀之内原遺跡付近地形図



IV 発掘調査の結果

1. 層序(第4図)

- 堀之内原遺跡の基本土層は、ほぼ5層に分かれる。
- 第Ⅰ層(表土層) ……遺跡の大半が桑園で、深耕のため表土の擾乱が著しく、地点によって若干の差異が認められる。これを、Ⅰa～Ⅰcに区分した。
- 第Ⅰa層 茶褐色を呈し、混在物、粘性はⅠa層と変わらないが、部分的にⅡa層の土をブロック状に混在する。
- 第Ⅰb層 暗茶褐色を呈し、混在物、粘性はⅠa層と変わらないが、部分的にⅡa層の土をブロック状に混在する。
- 第Ⅰc層 A66～68トレンチにのみ認められ、Ⅰb層に比較して、混在物が少なく、小礫が多くなる。
- 第Ⅱ層(黒色土層) ……表土からの擾乱が本層にまで達しているため、地点によりやはり若干の差異が認められる。これをⅡa～Ⅱcに区分した。
- 第Ⅱa層 黒色を呈し、黄白色と赤褐色粒子を含有する。
- 第Ⅱb層 やや灰色がかった黒色を呈し混在物はⅡa層と変わらないが、粘性は弱く、しまりは悪い。
- 第Ⅱc層 やや灰色がかった黒色を呈する点は、Ⅱb層と同じであるが、第Ⅲ層の暗褐色土のブロックを混在する。
- 第Ⅲ層(暗褐色土層) ……黄褐色粒(スコリア)を若干含有し、全体的にザラザラしている。
- 第Ⅳ層(黒褐色土層) ……小礫、赤色粒を含有し、粘性強く、しまりがよい。
- 第Ⅴ層(ソフトローム) ……1～2mm大の赤褐色スコリアを含有する。
- 本遺跡の遺構(奈良・平安時代)の確認面は、第Ⅲ層であった。



第4図 堀之内原遺跡標準土層図

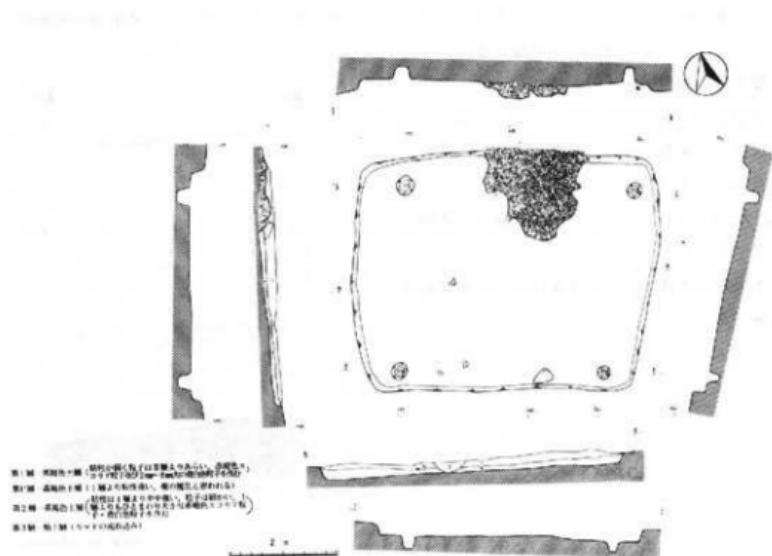
2. 遺構と遺物

(1) 第1号住居址と出土遺物

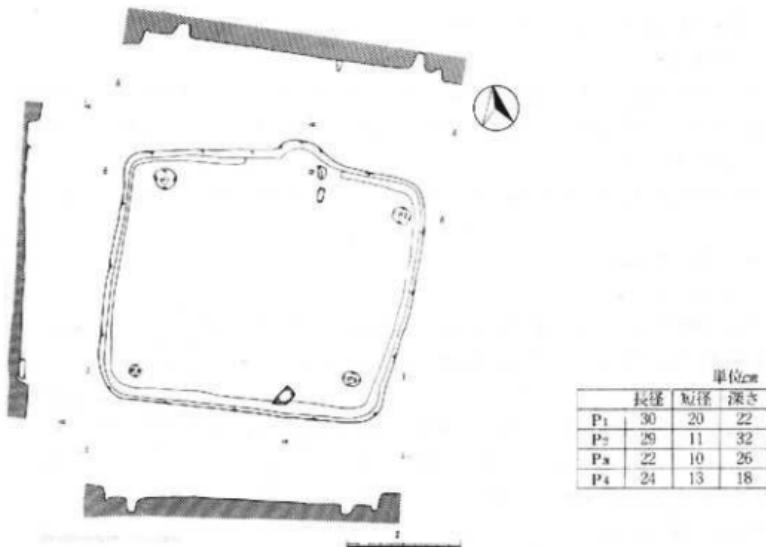
遺構 (第5～7図)

本住居址は、A-23・24、B-22～24、C-22～25、D-23・24区にかかり、第2号住居址の北側、第4号住居址の南側に位置する。

平面プランは、東西 5.5 m、南北 4.4 m の隅丸方形を呈している。本住居址の主軸方位は、N-18°—Eである。立ち上がりは、ほぼ垂直を呈し、壁高は、北壁カマド付近が 16 cm、南壁 15 cm、東壁 24 cm、西壁 19 cm である。床面は、南西側から北東側にかけて緩く傾斜しているが、全体的に固く踏み固められている。特に、カマド付近には粘土による貼り床がみられる。柱穴は、4 本がそれぞれコーナーのほぼ対角線上に位置する。周溝は、カマド付近を除いて檻際を巡る。最大幅部は、24 cm、最深部は、床面より -9 cm である。カマドは、煙道部東側の残存状態は良好であるが、西側はピットにより破壊されている。粘土を主体として構成されており、煙道部東側に 2 個の袖石が縦列をなしている。焚口部及び煙道部からは焼土が認められている。本住居址の水系レベルの標高は、418 m である。(平林 彰)



第5図 1号住居址平面図



第6図 第1号住居址平面図（掘り方）

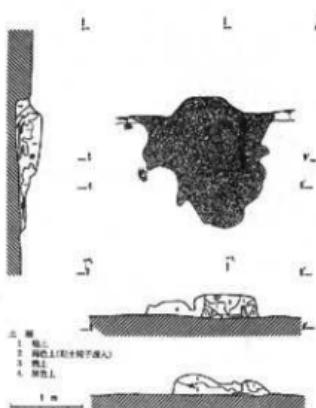
遺物（第8～9図）

本住居址からは、土師器・須恵器・鉄製品等の遺物が、717点出土した。この内訳は、土師器の壺形土器、口縁部37点、胴部322点、底部13点。环形土器191点、須恵器、斐形土器33点、环形土器9点、蓋1点、鉄製品1点であった。この内、実測できたものは、15点であった。

壺形土器（1～6）

A 1類（1・3・6）

胴下半部に斜方向箝削り整形が施されているもので、口唇部が尖形ないしは丸味を有する。内面には、花弁状=a種(1)、放射線状=b種(3)の暗文を有する。色調、赤褐色土はよく精選された粒子のこまかいものである。



第7図 第1号住居址カマド

よく精選された粒子のこまかいものである。

B 1類 (2)

ロクロ横ナデ整形のみで、胴半部に箝削り整形が施されていないものである。内面に放射線状暗文を有する。底部に糸切り痕を残している。色調は赤褐色。胎土は、よく精選されて、粒子のこまかいものである。

本住居址からは、墨書き器（4～6）が出土している。4は、側部、5・6は、底部に施されている。

甕形土器（7～11）

A 1類 (7～11)

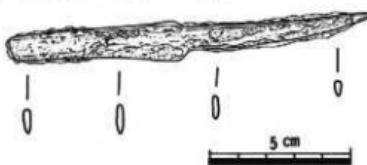
長胴の甕形土器で、外面一縱方向、内面一横方向にハケ目整形が施されている。口縁部は、比較的薄い作りで外反する。色調、暗褐色。胎土は、雲母、石英粒を、含有している。

須恵器 (12)

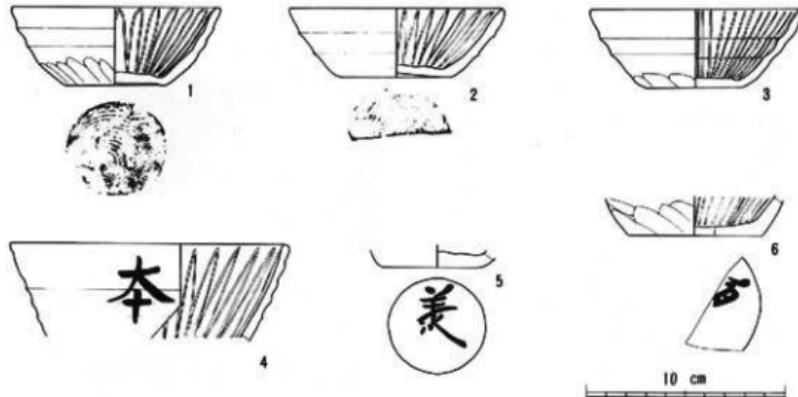
口縁部のみで、全貌は判明しないが、口径約30cm、頸部は、くの字状に外反し、口縁部に続き、口唇部は、肥厚している。

鉄製品 (第13図)

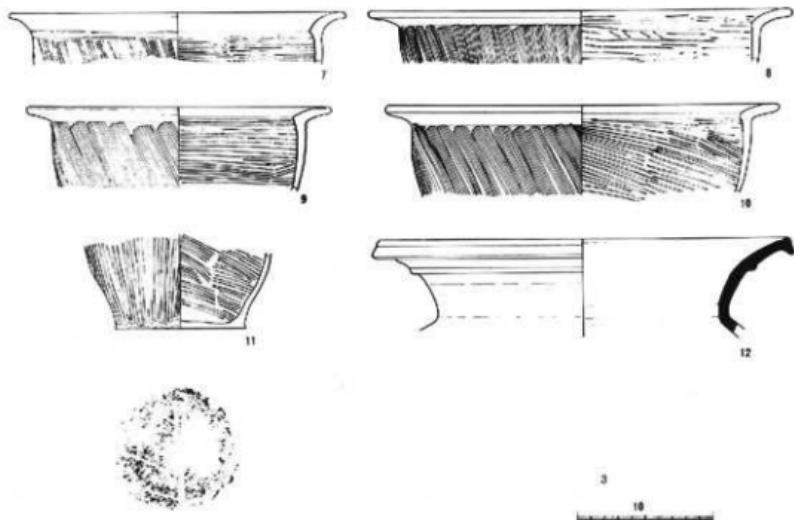
長さ12.7cmの刀子状のものである。カマド内より出土した。



第8図 第1号住居址出土鐵製品



第9図 第1号住居址出土土器 (1)



第10図 第1号住居址出土土器 (2)

第1表 第1号住居址出土土器一覧表

マーカー	種類	器形	寸法 (口径×底径) (高さ)	特徴 (L.G.)	(絞り)	(窓)	鉢	土	焼成	色調	備考
No.1	土器	鉢	10-1cm 4-9cm 3-9cm	外縁 内縁	内 ロクロ模ナメ表面付近へテ瓢箪 内 ハリに立らる有目模文	内 無	内 無	外子端丸い	白灰	内 茶褐色 内 -	上打法
No.2	土器	鉢	10-1cm 5-8cm 3-5cm	外縁	内 ロクロ模ナメ 内 ハリ	内 無	内 無	外子端丸い	白灰	内 茶褐色 内 -	
No.3	土器	鉢	10-1cm 4-7cm 4-6cm	外縁	内 ロクロ模ナメ 内 -	内 無	内 無	外子端丸い	白灰	内 茶褐色 内 -	底面左側の内 面へテ瓢箪
No.4	土器	鉢	14-2cm	外縁	内 ロクロ模ナメ 内 -	内 ハリ	内 無	外子端丸い	白灰	内 茶褐色 内 -	底面左端
No.5	土器	鉢	4-8cm				内 無	外子端へテ瓢箪 内 ロクロ模ナメ	白灰	内 茶褐色 内 -	底面左端
No.6	土器	鉢	8-8cm				内 無	外子端へテ瓢箪 内 ロクロ模ナメ文	白灰	内 茶褐色 内 -	底面左端
No.7	土器	カヌ	30-3cm	内 ライナ 内 ハナ模	外 ハナ模 内 ハナ模			外子端へテ瓢箪	白灰	内 茶褐色 内 茶褐色	
No.8	土器	カヌ	30-5cm	内 ライナ 内 ハナ模一様ナメ	内 ハナ模 内 ハナ模一様ナメ	内 ハナ模	内 平打灰土質	外子端へテ瓢箪	白灰	内 茶褐色	
No.9	土器	カヌ	20-0cm	内 ライナ 内 ハナ模	内 ハナ模 内 ハナ模			外子端へテ瓢箪	白灰	内 茶褐色 内 茶褐色	
No.10	土器	カヌ	20-0cm	内 ライナ 内 ハナ模	内 ハナ模 内 ハナ模	内 ハナ模	内 平打灰土質	外子端へテ瓢箪	白灰	内 茶褐色	
No.11	土器	カヌ	9-5cm		内 ハナ模 内 ハナ模			外子端へテ瓢箪	白灰	内 茶褐色 内 茶褐色	火ノ茶底
No.12	土器	鉢	30-0cm						白灰		

(2) 第2号住居址と出土遺物

遺構 (第11~13図)

本住居址は、A-8~11、B-8~11、C-8~11、D-8~11区にかかり、第4号住居址の東側、第1号住居址の南側に位置する。

平面プランは、南北5.3m、東西5mの隅丸方形を呈している。本住居址の主軸方位は、N-82°-Eである。立ち上がりはほぼ垂直を呈し、壁高は、20cmである。床面は、5~10cm大の礫を多く含む粘性の弱い赤色のロームであり、南側は、厚さ1~2cmほどの粘土による貼り床が認められる。柱穴は、7本検出された。周溝は、カマドを除いて壁際を巡る。幅は、12cm、深さは、床面より-5cmである。カマドは、東壁中央よりやや南によりに位置する。かなり攪乱されて保存状態はあまり良くない。石組及び袖石は認められず、又、ブロック状に粘土が認められただけで、カマドの形状は判明しなかった。焼土は、カマドの中央部に5cm程の厚さをもって検出された。本住居址の水系レベルの標高は、418mである。

(横山典夫)

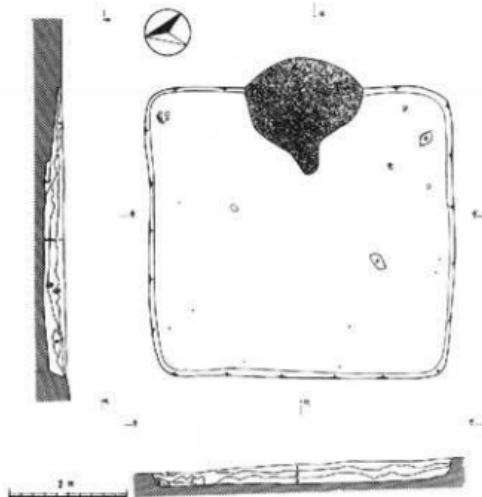
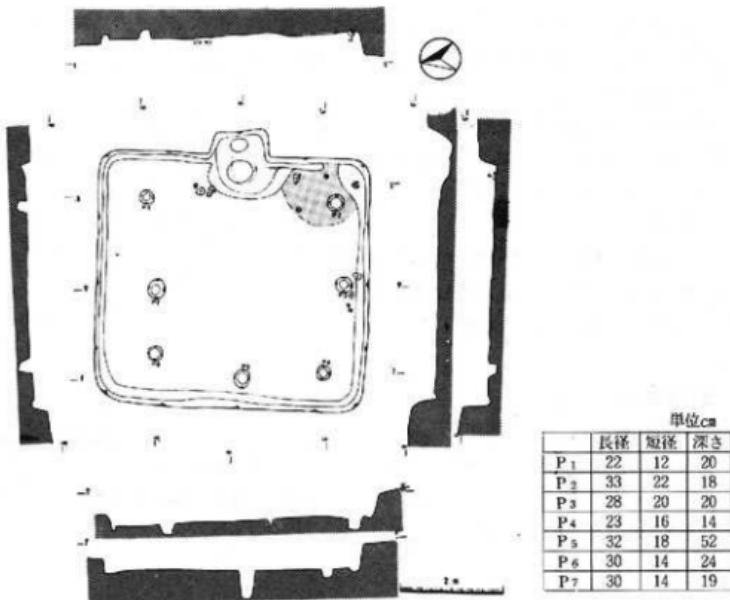


図11 第2号住居址平面図

- 第1層一層褐色土層（青白色粒子とスコリアを多量に含む）
青白色・黄褐色粒子とスコリア及び岩子の層
- 第2層一層褐色土層（土壌部分を含む）
- 第3層一層褐色土層（スコリアを含むやわらかい土層）— 褐色土層
青褐色・青白色的粒子（1mm~10mm）及び岩子
- 第4層一層褐色土層（黄褐色・青白色的粒子・燒土粒を多量に含む）
- 第5層一層褐色土層（青白色的細い粒子を含む）
- 第6層一層褐色土層（燒土粒があり、青白色・黄褐色の粒子を含む）→ブロック状

第11図 第2号住居址平面図



第12図 第2号住居址平面図（堀り方）

遺物（第14～15図）

本住居址からは、373点の遺物が出土した。この内訳は、土師器、壺形土器 147点、皿形土器 1点、斐形土器、口縁部 31点、胴部 189点、底部 4点、鉄製品 1点である。

この内、実測可能なものは、11点であった。

遺物は、大半が覆土中からのもので、1は、カマド南側床面上、10は、周溝内より、それぞれ出土した。

壺形土器（2～6）

A 2類（2・6）

胴下半部に斜方向施削り整形が施されているもので、口縁部がやや玉縁状を呈して



第13図 第2号住居址カマド

いるものである。A 1類に比べると、器高が低く、口径が大きい。内面に、花弁状(2)の暗文を有する。色調、赤褐色及び黄褐色、胎土は、良く精選されて粒子のこまかいものである。

A 3類 (3)

胴下半部に斜方向箝削り整形の施されているもので、内面に暗文の持たないものである。色調、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

B 2類 (5)

ロクロ横ナデ整形のみで、胴下半部に箝削り整形が施されていないもので、内面に暗文の持たないものである。色調、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

皿形土器 (1)

A 1類 (1)

胴下半部に回転箝削り整形が施されているもので、胸部にくの字状の縫を有する。色調、黄褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。底部、内外面に「本」という墨書きが施されている。

壺形土器 (7~10)

A 1類 (8~10)

長胴の壺形土器で、外面一縱方向、内面一横方向にハケ目整形が施され、口縁部は、比較的薄い作りで外反している。色調、茶褐色、赤褐色。胎土は、雲母、石英粒を含有する。

B 類 (7)

小形で長胴の壺形土器である。内面に横方向にハケ目整形が施されている。色調、茶褐色。胎土は、雲母、石英粒を含有する。

須恵器・环形土器 (4)

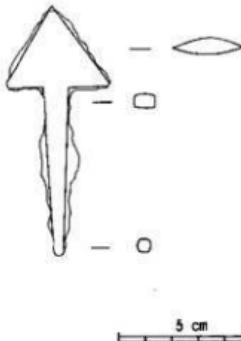
完形品ではないため全貌は明らかでないが、口径約12.2 cm。器形は、口縁部が内彎気味に立ち上がり、口唇部で外反する。

鉄製品 (1)

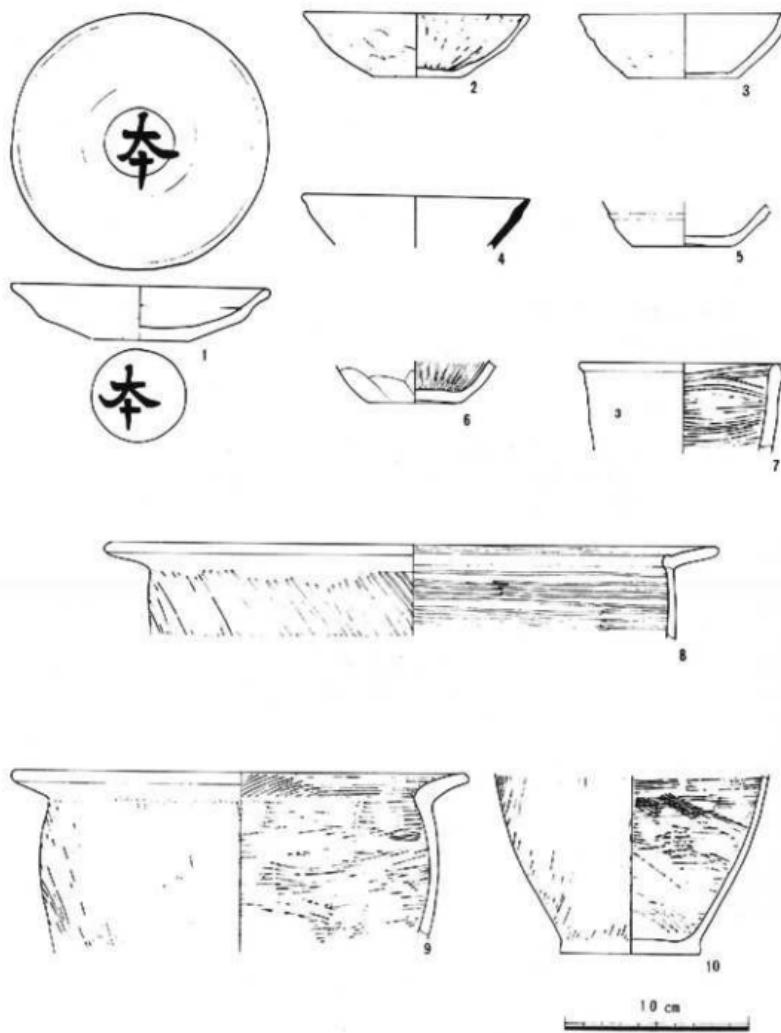
長さ 9.4 cm の鉄鎌状のものである。

第 2 表 第 2 号住居址出土土器一覧表

分類	器種	基準	径 (cm)	高さ (cm)	内面	外面	口縁	底	胎土	特徴
2.1	壺形	直	10.0~12.0	5.0~6.0	内面中空部 内	外側無	内側無	内側無	内側無	
2.2	土瓶形	平	10.0~12.0	4.0~5.0	内面中空部 内	外側無	内側無	内側無	内側無	
2.3	土瓶形	平	10.0~12.0	4.0~5.0	内面中空部 内	外側無	内側無	内側無	内側無	



第 14 図 2 号住居址出土鉄製品



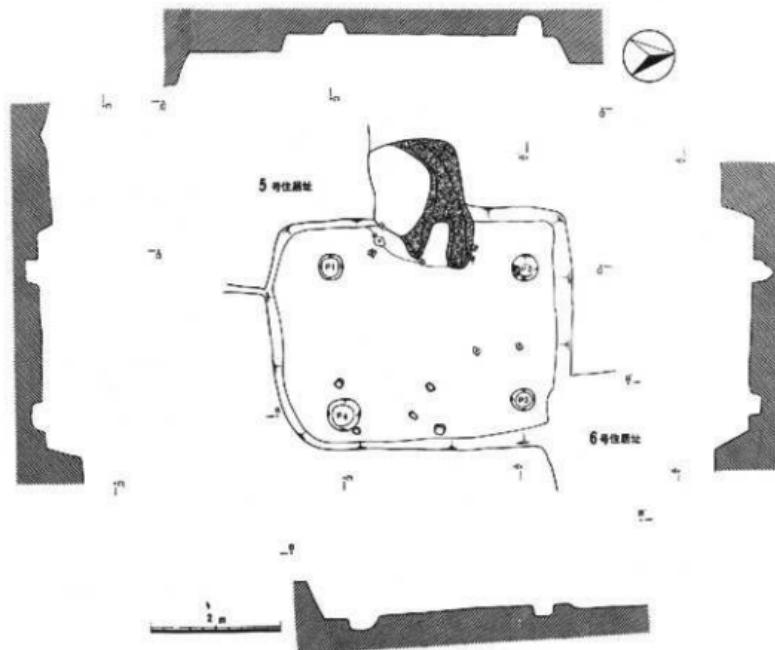
第 15 図 第 2 号住居址出土土器

No	位置	高さ	寸法	所見	内見	内見	内見	内見	内見	内見
No.4	北壁面	高	0.7m	外観	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内
No.5	北壁面	高	0.7m		内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内
No.6	北壁面	高	0.7m		内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内
No.7	北壁面	中	1.1~1.4m	外観	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内
No.8	北壁面	中	0.9~1.1m	外観	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内
No.9	北壁面	中	0.9~1.1m	外観	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内
No.10	北壁面	中	0.7m	外観	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内	内・外側に窓枠 内

(3) 第3号住居址と出土遺物

遺構 (第16~18図)

本住居址は、B—37・38、C—36~39、D—36~39区にかかり、南西部は5号住居址に、北東部は6号住居址に、それぞれ切られている。



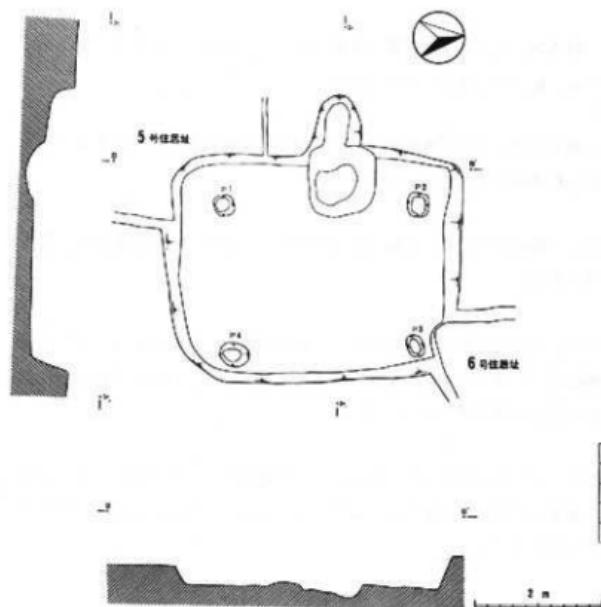
第16図 第3号住居址平面図

平面プランは、南北 4.6 m、東西 3.5 m の隅丸方形を呈する。本住居址の主軸は、N = 46° - W である。立ち上がりは、ほぼ垂直を呈し、壁高は、東壁 50 cm、西壁 30 cm である。床面は、良く踏み固められている。柱穴は、4 本検出された。周溝は、検出されなかった。カマドは、西壁中央よりやや北側に位置し、規模は、190 cm × 120 cm で、粘土によって構築されたものであった。本住居址の水系レベルの標高は、415 m である。

(相良雅男)



第 17 図 第 3 号住居址カマド



第 18 図 第 3 号住居址平面図（掘り方）

遺物（第 19 図）

本住居址からは、741点の遺物が出土した。この内訳は、土師器、坏形土器 142点、變形土器、口縁部 79 点、胴部 490点、底部 27 点。須恵器、坏形土器 2点、不明 1点である。この内、実測可能なものは、17点である。

遺物は、大半が覆土中からのものであった。

坏形土器（1～11）

C 1類（1・2）

底径の大きい坏形土器で、ロクロ横ナデ整形が施されている。1は、底部に静止糸切り痕が、2は、外面胴下部に向転籠削り痕が、それぞれ認められる。色調は、赤褐色及び、茶褐色。胎土は、粒子の細かいものである。

C 2類（3）

内外面に横方向に箒磨きが施されている底径の広い坏形土器である。色調は、黄味を帯びた茶褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

C 3類（4・5）

内面一横方向、外面一縦方向に、それぞれ箒磨きが施されている底径の広い坏形土器である。色調は、暗茶褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

C 4類（6・7）

内面一縦方向、外面一横方向に、それぞれ箒磨きが施されている底径の広い坏形土器である。色調は、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

C 5類（8）

内面に縦位（放射線状）に箒磨き（暗文）が施されているものである。色調、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

C 6類（9・10）

器外面胴下半に箒削りが、内面に横方向に箒磨きが、それぞれ施されている底径の広い坏形土器である。色調は茶褐色及び、淡いはだ色を呈し、胎土は 1～2 mm 大の白色、赤色、古代紫色を呈する粒子を含有し、器面がザラザラしている。

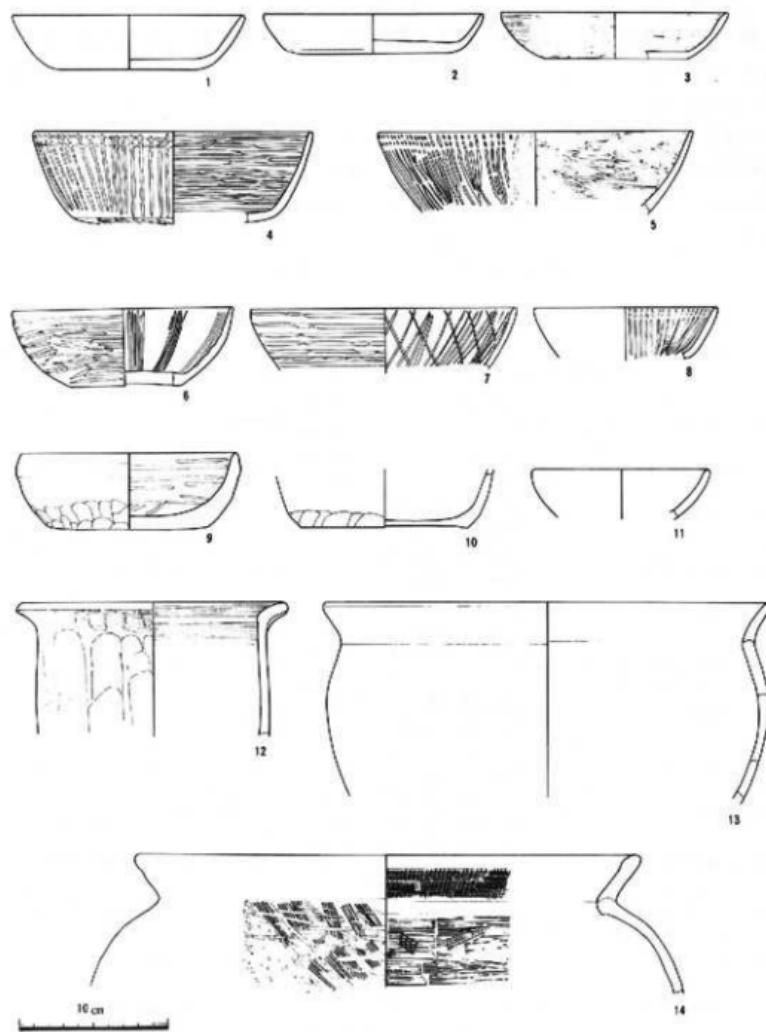
C 7類（11）

C 6類と同様に、色調は、淡いはだ色を呈し、胎土は、古代紫色の粒子を多量に含有し、器面はザラザラしている。胴下半に箒削りが施されていない点と、底部付近に、丸味を有する点、で C 6類とは異なるものと思われる。

變形土器（11～12）

A 3類（12）

外面に縦方向に箒削りが施されている長胴の變形土器である。色調は、暗褐色。胎土は、石



第 19 圖 第 3 号住居址出土土器

英粒与酵母含有。

C.1類 63

横ナデ整形が施されている胴張りの甕形土器である。色調は、黄茶褐色。胎土は、石英粒、雲母を含有する。

C. 2 項 加

口縁部が、「く」の字状に外反した胴張りの斐形土器である。器外面一櫛状工具によるかき目整形後、箇磨きが、内面一櫛状工具によるかき目整形が、それぞれ施されている。口唇内面に棱を有する。色調は、黄茶褐色。胎土は、1mm大の白色粒子含有した粒子のこまかいものである。

第3表 第3分住居址出土土器一覽表

ナンバー	種類	形態	法線 (ax)		垂 線		粒 土	成 分	色 調	名 称
			内	外	左	右				
No.1	北極地	球	10×8	9×6	3×7	外 傾 内	内クロコテナナ 内	内ヒラヒラタ 内クロコテナナ	粒子細かい 均好	赤褐色
No.2	北極地	球	10×8	9×6	3×7	外 傾 内	内クロコテナナ 内	内クロコテナナ 内	粒子細かい 均好	赤褐色 白褐色
No.3	北極地	球	15×4	9×5	3×2	外 傾	内クロコテナナ側方約膨張 内クロコテナナ側方約膨張 内ヒラヒラタ側方約膨張 内ヒラヒラタ側方約膨張	粒子細かい 均好	赤褐色 黃褐色	
No.4	土陸地	球	約21×5			外 傾	内クロコテナナ 内傾側方約膨張	粒子細かい 均好	赤褐色	
No.5	土陸地	球	19×6			外 傾	内クロコテナナ 内傾側方約膨張	粒子細かい 均好	赤褐色	
No.6	七脚蟲	球	約15×8	約5×3	約7×5	外 傾 内	内クロコテナナヘリテナ 内	内ヒラヒラ 内クロコテナナヘリテナ	粒子細かい 均好	赤褐色
No.7	土陸地	球	約18×8			内外傾	内クロコテナナ(前方側面約4~5mm の歯状突起が下部側面に現れる) 内クロコテナナ(前方側面約4~5mm の歯状突起が下部側面に現れる)	粒子細かい 均好		
No.8	土陸地	球	13×4			外 傾	内クロコテナナ 内	粒子細かい 均好		
No.9	土陸地	球	14×7	5×2	10×8	直 立	内ヒラヒラテナ下部へ割り 内クロコテナナヘリテナ	内ヒラヒラ 内ヒラヒラ	1mm~2mmの砂粒 (白・赤)均好	赤褐色 白褐色
No.10	土陸地	球	約11×3			外 傾 内	内クロコテナナ側方側面へ割り 内	内ヒラヒラ 内クロコテナナ	石炭灰・小粒含む 均好	赤褐色 均好
No.11	七脚蟲	球	約12×1			外 傾 内	内クロコテナナ 内		かなりの不規則な粒子 均好	赤褐色 黄褐色
No.12	土陸地	カサ	約10×5				内テナ		心臓灰・葉緑素含む 均好	赤褐色
No.13	土陸地	カサ	約21×7				内テナ 内		茎母・石英含む 均好	赤褐色
No.14	土陸地	カサ	約24×4				内ヒラヒラ 内ヒラヒラ 内ヒラヒラ 内ヒラヒラ 内ヒラヒラ	白灰灰(±1mm)含有 粒子細かい 均好	赤褐色	

(4) 第4号住居址と出土遺物

遺構 (第20~22図)

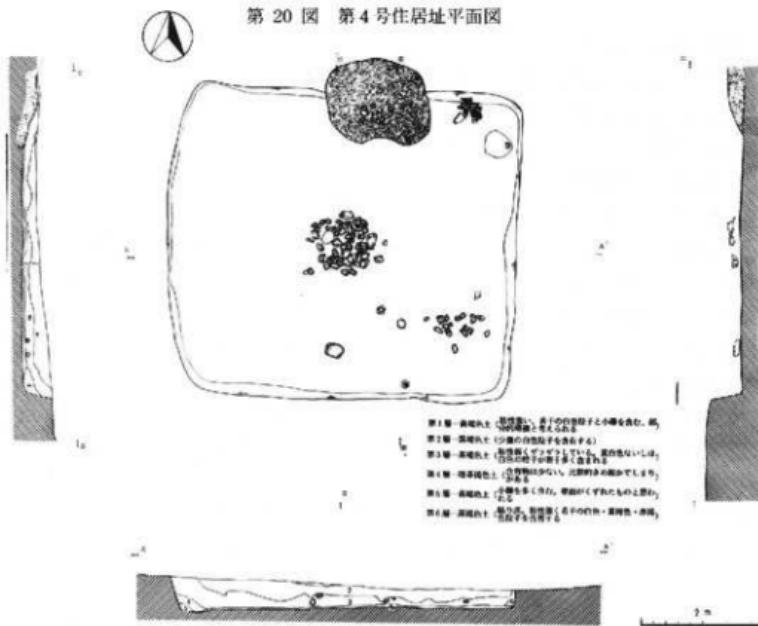
本住居址は、E—6～8、F—6～8、G—6～8区にかかり、第2号住居址の西側に位置する。

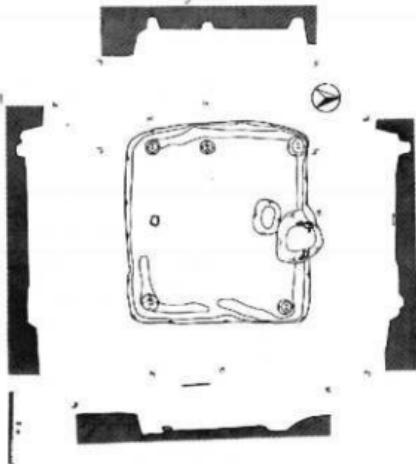
平面プランは、南北 5.5 m、東西 4.9 m の、西側にやや膨みのある方形を呈する。

本住居址の主軸は、N—3°—E である。立ち上がりは、ほぼ垂直を呈し、壁高は南西部で 70cm、北東部で 25 cm である。床面は、厚さ 5 cm の黒色土が貼られ、よく踏み固められ緻密で堅固なものである。ピットは、6 本検出され、柱穴は、コーナ部に 4 本検出された。周溝は、南壁と東壁の一部及び、カマドを除いて巡っている。最大幅 40 cm、最小幅 8 cm、最深幅 13 cm である。カマドは、北壁中央よりやや東側に位置する。規模は、1.3 m × 1.5 m である。両側に 3 個の抽石を配し、それを芯に粘土が貼られている。焚口部は、70cm × 65cm、深さ床面より 20cm の掘り方を有し、焼土が厚さ 20 cm 程堆積している。

住居址の中央部床面上に、1 m × 1 m 程の広がりを有する集石がある。これは、5 cm ~ 30 cm 大の礫 60 個によって形成されたもので、集石内には、粘土ブロックも認められた。本住居址の水系レベルの標高は 418m である。 (鈴木達仁)

第 20 図 第 4 号住居址平面図





単位cm		
	長径	短径
P ₁	49	30
P ₂	40	28
P ₃	38	20
P ₄	38	20
P ₅	40	30
	22	13
	31	22

第 21 図 第 4 号住居址平面図（掘り方）

遺物（第 23・24 図）

本住居址からは、871点の遺物が出土した。

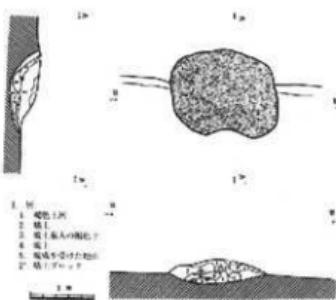
この内訳は、土師器、甕形土器、口縁部 72点、底部 13点、胴部 425点。坏形土器、290点内、完形品 1 点、内面黒色 17 点、須恵器、甕形土器 48 点、坏形土器 1 点、壺形土器 3 点。灰釉陶器 1 点である。

遺物は、1が、カマド内、18～19が、床面上より、それぞれ出土した。それ以外の遺物は、覆土からのものであった。

坏形土器（1～9）

A 3類 (1)

胴下半部に斜方向箝削り整形が施されているもので、内面に暗文を持たないものである。底部に「本」と言う墨書が施されている。色調は、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。



第 22 図 第 4 号住居址カマド

B 1類 (3~6)

ロクロ横ナデ整形のみで、胴下半部に範削り整形が施されていないもので、内面に花卉状に暗文を有するものである。色調は、赤褐色、茶褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

D 1類 (2)

内面黒色の土器で、内面暗文を持たないものである。色調は、茶褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

D 2類 (7~9)

内面黒色の土器で、内面に、放射線状(7)+らせん状(8・9)の暗文を有するものである。色調は、外面、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

E類 (4)

削り出し高台付の坏形土器である。内面に、らせん状暗文を有する。

血形土器 (10~15)

A類 (14・15)

胴下半部に回転範削り整形が施されているもので、胸部に「く」の字状の稜を有するものである。色調は、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

B類 (11・12・16)

胴下半部に斜方向範削り整形が施されているものである。色調は、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

C類 (10・13)

ロクロ横ナデ整形が施されているもので、口唇部は若干、玉縁状を呈している。色調は、赤褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

變形土器 (21~25)

A 2類 (21~25)

長胴の塊形土器で、外面一縱方向、内面一横方向にハケ日整形が施され、口縁部は、肥厚氣味で外反している。色調は、赤褐色、暗茶褐色。胎土は、石英粒、雲母を含有する。

須恵器 (18・20)

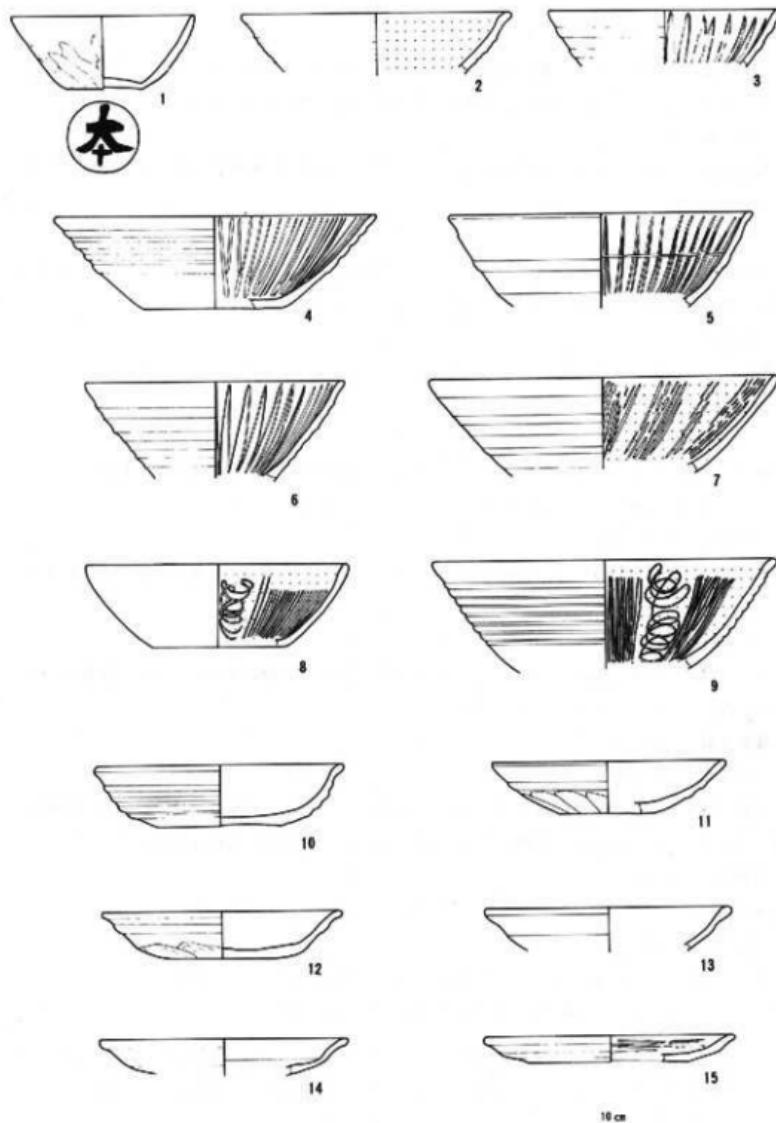
底部の破片のため、器形は不明であるが、壺形を呈するものと思われる。

灰釉陶器 (8)

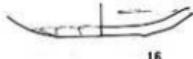
底部の破片のため、器形は不明であるが、高台付の坏形土器であると思われる。

第4表 第4号住居址出土土器一覧表

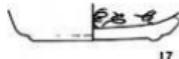
ナンバー	種類	器形	法規	(1)径)(底径)(高さ)	器形(口縁)	(脚部)	(足部)	胎土	焼成	色調	備考
No 1	土師器	壺	10~10cm	4~6cm	4~6cm	外縁 内縁 内反	ロクロ横ナデ 内→外削り 内	ヘア削り(本) 蓋 内ロクロナデ	粒子細かい	赤褐色	
No 2	土師器	壺	約14~8cm			やや玉縁 外反	ロクロ横ナデ 内	(破5本)	粒子細かい	良好	赤茶褐色 内黒



第 23 図 第 4 号住居址出土土器 (1)



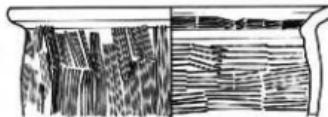
16



17



18



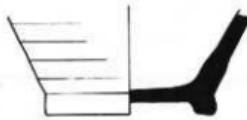
21



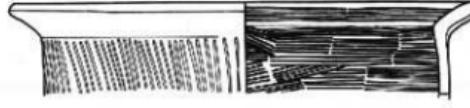
19



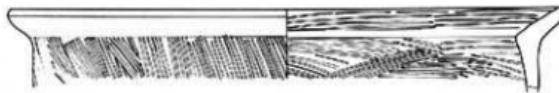
22



20



23



24



25

10 CM

第 24 図 第 4 号住居址出土土器 (2)

第4表 第4号住居址出土土器一覧表 (P23よりつづく)

No	土器器	环	約2~7cm	外縁	内(ロクロ模ナデ ロクロ模ナデ 内(透文(花弁状))	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.4	土師器	环	約1~6cm 約7~8cm 約5~1cm	外縁	内ロクロ模ナデ 内(ロクロ模ナデ 内(透文(花弁状))	粒子細かい	良好	赤褐色 内灰褐色	
No.5	土師器	环	約4~6cm	外縁	内ロクロ模ナデ底部 内(透文(花弁状))	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.6	土師器	环	約3~4cm	外縁	内ロクロ模ナデ(透 内(透文(花弁状))	粒子細かい	良好	赤褐色 内黑	
No.7	土師器	环	約2~1cm	外縁	内ロクロ模ナデ 内	粒子細かい	良好	赤褐色 内黑	
No.8	土師器	环	約1~4cm 約7~2cm 約4~5cm	外縁	内ロクロ模ナデ 内(透文、透文)	粒子細かい	良好	赤褐色 内黑	
No.9	土師器	环	約1~9cm	外縁	内ロクロ模ナデ 内(透文有する 内ロクロ模ナデへ透(透文))	粒子細かい	良好	赤褐色 内黑	
No.10	土師器	环	約1~7cm 約5~6cm 約3~4cm	やや玉縁	内ロクロ模ナデ 内	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.11	土師器	环	約1~2cm 约5~6cm 约2~3cm	外縁	内ロクロ模ナデ底部 内(透)へう割り 内	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.12	土師器	环	約1~2cm 约5~6cm 约2~3cm	やや玉縁	内ロクロ模ナデ下部 内(透)へう割り 内	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.13	土師器	环	約3~5cm	やや玉縁	内ロクロ模ナデ 内	粒子細かい	良好	赤褐色 内灰褐色	
No.14	土師器	皿	約3~6cm	やや玉縁 外縁	内ロクロ模ナデ 内(透)へう割り	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.15	土師器	环	約5~8cm	やや外縁	内ロクロ模ナデ 内(透)へう割り	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.16	土師器	皿	約5~6cm		内(透)底近く手持ちへう割り 内	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.17	土師器	皿(透 り出る 高)	約8~8cm		内(透)ロクロ模ナデ 内(透)ロクロ模ナデ 内(透)透(透文)	粒子細かい	良好	赤褐色	
No.18	灰	輪	約9~6cm		内(透)ロクロ模ナデ 内	石英酸灰 有	良好	灰褐色	
No.19	灰	輪	約12~5cm		内(透)ロクロ模ナデ 内(透)透(透文) 内	石英酸灰 有	良好	灰褐色 (白粉を 含む)	
No.20	灰原23 (23.7)		約9~3cm		内(透)ロクロ模ナデ 内(透)高台 内	石英酸灰 有	良好	灰褐色 (白粉を 含む)	
No.21	土師器	カメ	約3~9cm	内(透)ハケ模 内(透)ハケ模 内(透)ハケ模	石英 石英含有	良好	赤褐色 内灰褐色		
No.22	土師器	カメ	約25~6cm	内(透)ナデ 内(透)ハケ模 内(透)ハケ模	透 石英含有	良好	赤褐色		
No.23	土師器	カメ	約25~6cm	内(透)ナデ 内(透)ハケ模	透 石英含有	良好	赤褐色		
No.24	土師器	カメ	約32~9cm	内(透)ナデ 内(透)ハケ模 内(透)ハケ模	透 石英含有	良好	赤褐色		
No.25	土師器	カメ	約29~7cm	内(透)ナデ 内(透)ハケ模 内(透)ハケ模→ナデ	透 石英含有	良好	赤褐色		

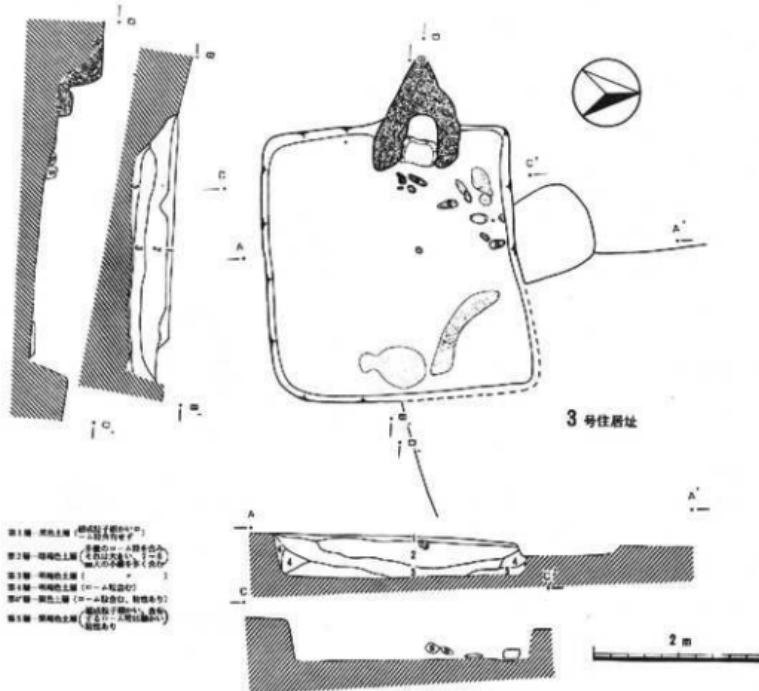
(5) 第5号住居址と出土遺物

遺構（第25～27図）

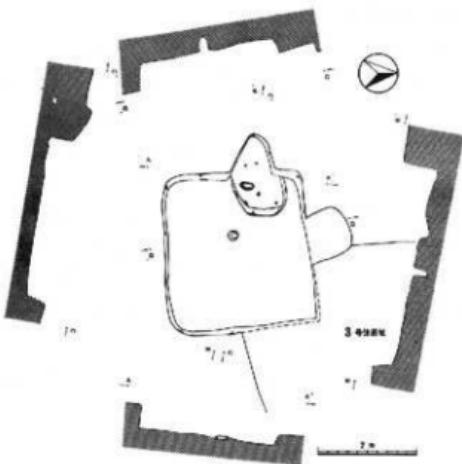
本住居址は、D-36～38、E-36～38、F-36～38区に位置し、第3号住居址の南西部を切って（3号住居址にかかる部分は、貼床が貼られている。）構築されている。平面プランは、北辺3.16m、東辺3.05m、南辺3.16m、西部2.9mの、四隅にやや丸味を帯びる方形を呈する。

本住居址の主軸方位は、N-46°-Wである。立ち上がりは、ほぼ垂直を呈し、北壁36cm、東壁45cm、南壁48cm、西壁49cmの壁高を有する。床面は、全体として良好であり、北東部に向かって若干傾斜している。東壁際中央部に焼上が、約50cm×80cmの規模で広がっている。又、北壁際からカマド焚口部に渡り、10cm大～30cm大の礫が数個、さらに、40cm大の粘土ブロック、15cm大の焼土ブロックが散在している。

柱穴は、1本検出。カマドは、粘土により構築されたものと思われる。規模は、110×165cm



第25図 第5号住居址平面図



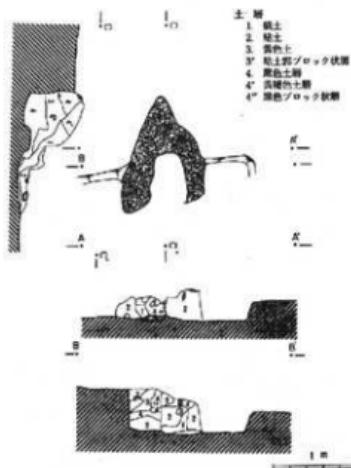
第 26 図 第 5 号住居址平面図（掘り方）

程で、カマド内には、焚口付近に礫が 1 個残存している。（支脚として用いたものであろうか。）焼土は、焚口付近で 12cm × 30 cm の範囲に厚さ 15cm 程堆積している。さらに、焼土は、10cm～18cm 程の厚さで住居址外部に向かって約 40° の角度で延びている。これが煙道と思われる。焚口部掘り込みは、床面より約 15cm 程掘り込まれていて。本住居址の水系レベルの標高は、415m である。（片山雅文）

遺物（第 28 図）

本住居址からは、225 点の遺物が出土した。内訳は、土師器、壺形土器 8 点、甕形土器、口縁部 21 点、底部 3 点、胸部 84 点。須恵器、壺形土器 1 点。甕形土器、口縁部 21 点、底部 3 点、胸部 84 点である。

遺物は、ほとんど覆土中からのものであった。



第 27 図 第 5 号住居址カマド

坏形土器 (1)

B 2類 (1)

ロクロ横ナデ整形が施されているもので内面に放射線状の暗文を有する。B 1類に比べて、底径が広く、又、底部が角張っている。器壁も薄い。色調は、茶褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。

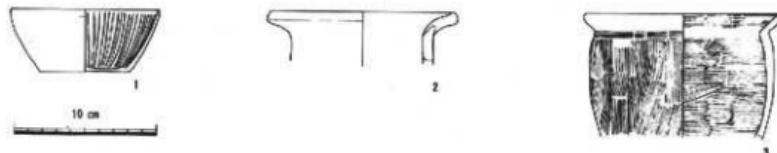
變形土器 (2・3)

A 1類 (3)

長胴の變形土器である。外面一縱方向、内面一横方向に、ハケ目整形が施されている。口縁部は、比較的の薄い作りで外反している。色調は、暗茶褐色。胎土は、雲母、石英粒含有。

A 4類 (2)

長胴の變形土器である。口縁部は、肥厚気味に外反している。色調は、淡いはだ色。胎土は、古代紫色の小砂粒を多量に含有し、器面がザラザラしている。



第 28 図 第 5 号住居址出土土器

第 5 表 第 5 号住居址出土土器一覧表

ナンバー	種類	器形	底径 (口径) (高さ) (基高)	整形 (口縁) (側面)	(底面)	胎 土	色 調	備 考
No. 1	土器器	杯	約 5 cm × 6.3 cm × 4.8 cm	外板 内ロクロ横ナデ下部へ 内曲りヘラ 内ロクロ	内曲りヘラ 内ロクロナデ 内暗文	粒子細かい	良好	変形土器一部 内曲りヘラ 内ロクロ 内茶褐色
No. 2	土器器	カヌ	約 10~5 cm	内横ナデ 内ヘ		小砂粒有 (1 mm 大きなも 合む)	良好	はだ色 器之内部 pe のカヌ
No. 3	土器器	カヌ	約 14~6 cm	内ナデ 内ハケ 内ハケ 内ハケ(暗状)		雲母石英有	良好	暗茶褐色

(6) 第 6 号住居址と出土遺物

遺構 (第 29~31 図)

本住居址は、A—36~38、B—36~38区に位置し、第 3 号住居址を切って構築されている。

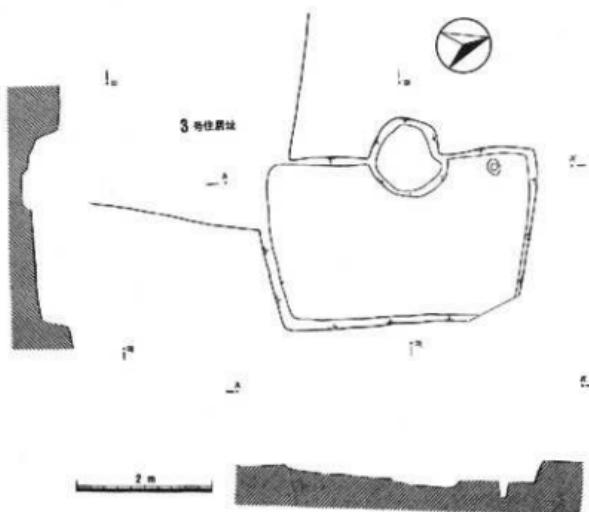
平面プランは、北辺 2.4 m、南辺 2.7 m、東辺 3.6 m、西辺 4.05 m の不正方形を呈する。本住居址の主軸方位は、N—59°—Wである。立ち上がりは、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、北壁 54 cm、南壁 47 cm、東壁 40 cm、西壁 43 cm の壁高を有する。床面は、南壁際を除いて、固くしまっている。床面全体に渡り炭火物、焼土ブロック、炭化材が認められた。

カマドは、かなり破壊されて、保存状態は良くないが、石組カマドで、1.18m × 1.15m の



第29図 第6号住居址平面図

説1: 墓石土塁 (一ノ一の墓石が石室などにみられず、独立して)
 説2: 墓石土塁 (一ノ一の墓石が石室などにみられず、独立して)
 説3: 墓石土塁 (2ノ2の墓石はしてて立木を置く、か・墓石柱子等)
 説4: 墓石土塁 (3ノ3の墓石を多く置く)
 説5: 墓石土塁 (4ノ4の墓石を多く置く、カーブ(カーブ))
 説6: 墓石土塁 (5ノ5の墓石を多く置くと木の柱子が大きい)
 説7: 墓石土塁 (6ノ6の墓石を多く置く)



第30図 第6号住居址平面図（掘り方）

規模を有し、北側3個、南側1個の袖石と、天井石が残存している。焼土は、焚口部で約5cm程堆積しており、その範囲は、50cm×35cmである。焚口掘り込みは、床面より-12cmで、焼土下には、炭化物混じりの茶褐色土が堆積している。カマド内より、土師器の壺形土器半個体分が潰れた状態で出土した。本住居址の水系レベルの標高は、415mである。

(工藤信一郎)

遺物（第32図）

本住居址からは、94点の遺物が出土した。内訳は、土師器一坏形土器7点、高坏形土器1点、壺形土器、口縁部6点、胴部72点、底部3点。須恵器一高台付の坏形土器2点、壺形土器3点である。

遺物は、1が、床面上、6が、カマド内、よりそれぞれ出土。それ以外は、覆土内からのものであった。

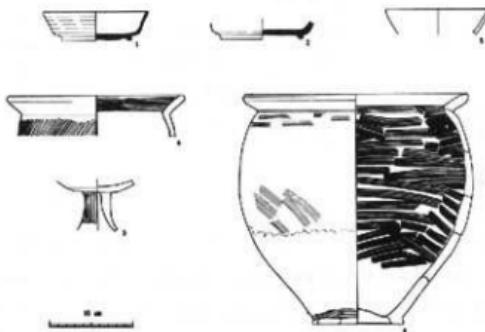
坏形土器 (3)

B 2類 (3)

ロクロ横ナデ整形が施され、内面に暗文の持たないものである。色調、茶褐色。胎土は、粒子のこまかいものである。



第31図 第6号住居址カマド



第32図 第6号住居址出土土器

高杯形土器 (5)

脚部の破片で、脚部外面に縦位に範磨きが施されている。色調、茶褐色。胎土、白色粒子含有。

變形土器 (4・6)

A 5類 (4)

長胴の變形土器で、外面一縱方向、内面一口縁部に横方向に、それぞれハケ目整形が施されている。内面胴部は、横ナデによる整形が施されている。

C 3類 (6)

胴張りの變形土器で、外面一横方向、斜方向に範ナデ整形が、内面一ハケ目整形が、横方向に施されている。色調、淡いはだ色。胎土、1~2mm大の赤色、古代紫色の砂粒をかなり含有している。

須恵器 (1・2)

高台付の杯形土器である。高台部は、付高台による。色調、灰褐色。胎土、白色粒子含有。

第6表 第6号住居址出土上器一覧表

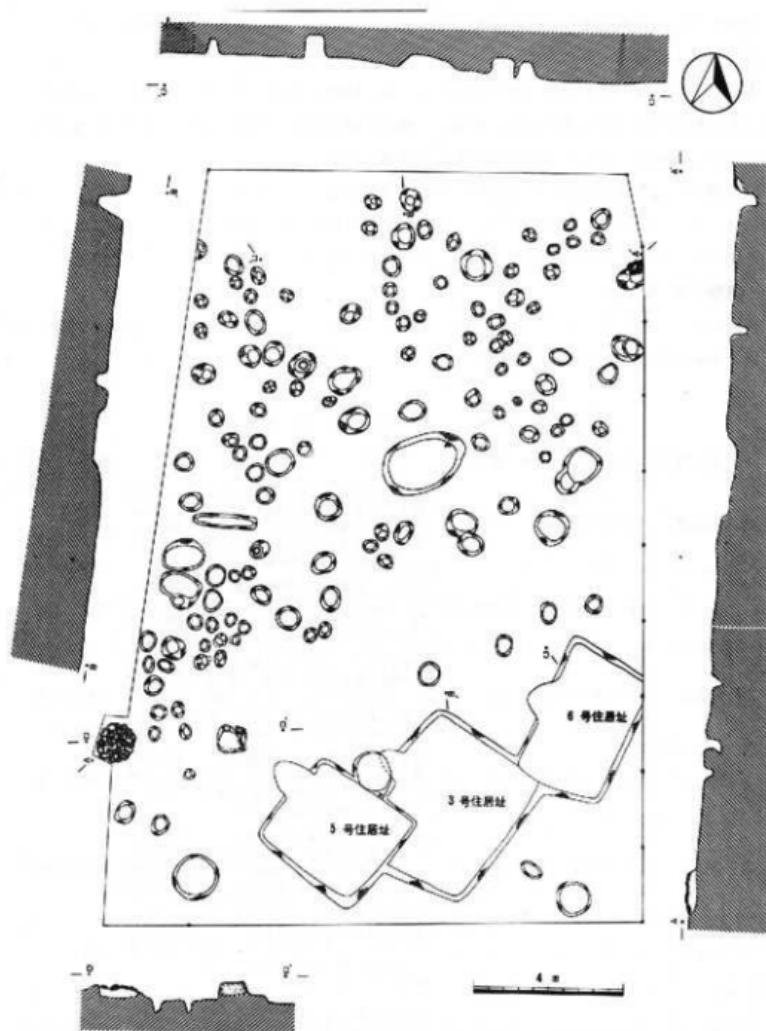
ナンバー	種類	器形	通量 (口径)(底径)(基高)	形状 (口径) (周径)	(底面)	胎土	構成	色調	備考
No.1	須恵器	高台付耳	12~8cm 8~5cm 3~5cm	外輪 内 内	内ロクロ横ナデ 内 内	内ロクロナデ(内側) 内ロクロナデ 白色粒子含有	良好	灰褐色	
No.2	須恵器	高台付耳	9~8cm		内ロクロ横ナデ 内 内	内手切り(付高台) 内ロクロ水びき痕	白色粒子含有	良好	灰褐色
No.3	土器	杯	13~6cm	外輪 内 内	内ロクロ横ナデ 内 内		粒子細かい	良好	茶褐色
No.4	土器	便	21~4cm		内横ナデ 内ハケ線 内ハケ線 内横ナデ		當時石英含有	良好	暗褐色
No.5	土器	高杯			内ロクロ横ナデ 脚部内ヘラ削り 内 内ロクロ横ナデ		白色粒子含有	良好	茶褐色 1mm大のカリア含有 (1粒)
No.6	土器	便	20~8cm 10~9cm 21~7cm		内横ナデ、底部付近 内ヘラ削り 内面ナデ		2~3mm大の古代紫を呈する粒子含有	良好	古代紫 木ノ星底

(7) ピット群と出土遺物

遺構 (第33図)

A~H-41~48区、第Ⅲ層上面において検出したピットは、総数136を数える。

この内、口径は、30~40cmのものが全体の36%で最も多く、次いで45~60cmが33%、60~70cmが21%、90cm以上が5%、75~90cmが4%、15~30cmが1%である。深さは、30~45cmが全体の36%で最も多く、次いで45~60cmが34%、60cm以上が19%、15~30cmが11%である。断面の形状は、台形をさかさにした形となるものが全体の58%と最も多く、次いで凹筒形となるも



第 33 図 ピット群の全体図

のが30%で、この両方を合わせると88%と、大半を占める。又、断面が二段構造を呈するものが全体の4%程度認められた。

平均してみると、口径は30~60cm、深さ30~60cm、断面の形状は、台形もしくは円筒形と、ある程度の統一性が看取され、配列から掘立柱建築遺構の存在が想起されるが、配列及び、組合せが、重複しているためか具体的な想定は困難である。

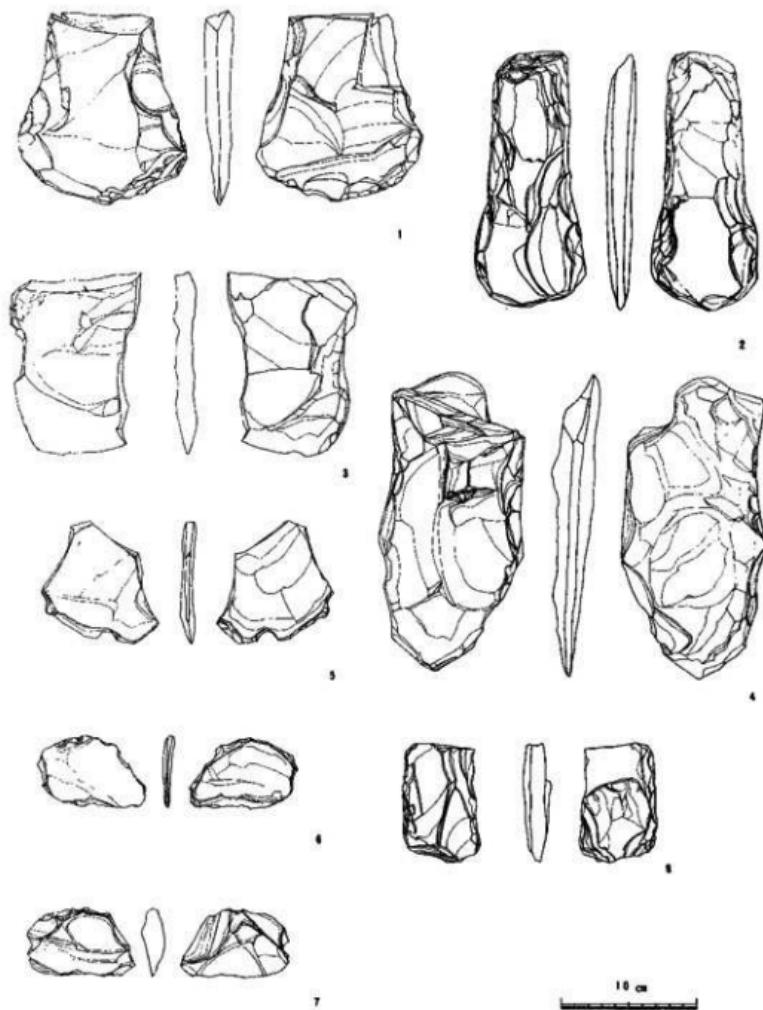
出土遺物は、第Ⅲ層上面にて散発的に打製石斧等石器が6点出土したのみで、直接にピット群に伴うものは認められなかったが、これの構築の時期は、No.136P+Tが3号住居址のカマドを切り込んでいる点から考えてみて、3号住居址以後のものと思われる。（喜多圭介）

遺物（第34図）

直接にピット群に伴うものは、上記のとおり認められたかったが、P+Tが検出された同地区Ⅲ層中にて7点の石器類が認められた。これは以下表に掲げたとおりである。

第7表 表様・ピット群出土の石器一覧表

No.	石質	最長部(タテ×ヨコ) cm	器形名	内 容	備 考
1	安山岩	14・0×12・0	不 明	器面は、打製による剝離技法によって形状を整えている。先端は刃部と想定され、基部より広がって横幅を呈する。刃部は細部加工によって調整され、ゆるやかな曲線を呈している。断面は、やや厚く扁平である。	第1盛(D-I) 内覆土
2	砂 岩	19・2×7・9	打製石斧	器面は、打製による調整剝離によって一周され、基部から側面が縦長で、側面から刃部が短く、丸みを帯びて広がっている。材質は脆く割れやすい状態を呈している。	第Ⅲ層上面
3	硬砂岩	13・7×9・5	不 明	器面は大きく打撃する剝離によって形状を整え刃部が锐利である他は、縁辺を直角に剥離して山の背状を呈している。側面から刃部にかけて深い抉りを入れている。断面は扁平で刃先は鋭角を呈している。	第Ⅲ層上面
4	砂 岩	22・3×10・5	不 明	基部に大きな抉込みの剝離を呈し、縦長の側面から刃先を尖す。刃部へと器形を整え锐利にした刃部の他は钝い角度の縁辺を呈する。器厚があり断面は扁平である。	第Ⅲ層上面
5	硬砂岩	9・1×8・5	不 明	器面は大きく打撃する剝離によって形状を整え、一端を刃先に、反対の縁辺を山の背にしている。刃部は画面の縁辺から鋭角に細部加工を施している。刃部は抉りが施されている。断面は扁平である。材質は脆く割れやすい。	第Ⅲ層上面
6	粘板岩	5・2×7・9	不 明	器面は打製による調整剝離によって、形状を整えており刃先を锐利にした縁辺を一端に施し、反対の縁辺を山の背状にしている。刃部はほぼ直線的である。断面はやや扁平である。	第Ⅲ層上面
7	砂 岩	7・0×5・1	不 明	器面は打製による調整剝離によって形状を整えており、刃部を锐利にした縁辺を一端に施し、反対の縁辺を山の背状にしている。刃部はほぼ直線的である。断面はやや扁平である。	第Ⅲ層上面
8	安山岩	8・9×5・5	打製石斧	形状は方形を呈し、細部加工が刃部および側面を一周している。器厚はやや厚く、基部を欠損している。	表 様



第34図 表様・ピット群出土の石器

(8) トレンチ出土の遺物

縄文時代の遺物（第 35～36 図）

本遺跡において、トレンチ及び、土師期の住居址から出土した縄文土器片の内、図版化できたのは 12 片であった。

この内、1 は東海系の早期末に、2 は諸磯 b 式に、3 は諸磯 c 式に、それぞれ比定できよう。4、5 は中期初頭の五領ヶ台式に、6 は、同期中葉藤内式に、7～9 は後期初頭の堀之内 I 式に、10 は、同期末の曾谷式に比定されるかと思われる。11、12 は、所謂晚期初頭の東海地方の清水天王山式に比定できよう。

以上、本遺跡出土の縄文式土器について述べたが、全体的に、表面採集及び、土師期の遺構の覆土中より出土したものが多く、ローリングを受け器面が荒れている。11、12 は、配石（C—61～63 トレンチ内）に伴って出土した。本遺跡約 1 km 南方に同時期の遺物を多量に出土している中谷遺跡（昭和 54 年度調査、報告書未刊）があり、本遺跡との関係が注目される。

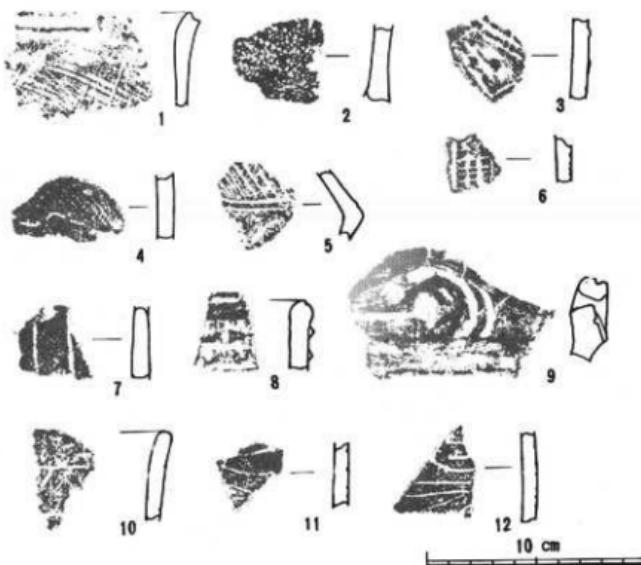
（谷口 栄）

第 8 表 トレンチ出土の縄文式土器一覧表

No	部 位	施文具	文 標	胎 土	焼 成	時 期	出 土 地 点
1	II 緑部	棒状施文具	斜交沈線文	少量の織維を含む	良 好	早期末	表面採集
2	胴 部	R L R	斜行縄文		〃	前期諸磯 b 式	3 号住居址覆土
3	"	半 截 竹 管	朱墨+結節浮雕文トボタン状結節文		〃	前期諸磯 c 式	2 号住居址覆土
4	"	R R L	結節縄文		〃	中期初頭 五領ヶ台式	〃
5	頸 部	半 截 竹 管 へら状施文具	沈線文		〃	〃	表面採集
6	胴 部	棒状施文具 へら状施文具	沈線文+格子状沈線文		〃	中期中葉 藤内式	3 号住居址覆土
7	"	棒状施文具	沈線文		〃	後期初頭 堀之内式	2 号住居址覆土
8	口 緑 部		隆 莺 文 (無み入り)		〃	〃	C—61～63 トレンチ
9	"	棒状施文具	沈線文		〃	〃	3 号住居址覆土
10	"	L R, 棒状施文具	磨 消 し 縄 文		〃	後期末 曾谷式	A—71～73 トレンチ
11	胴 部	棒状施文具	入 組 文		〃	後期初頭 清水天王山式	C—61～63 トレンチ
12	"	"	"		〃	〃	〃

トレンチ及び土師期の住居址より出土した石器は、あわせて 9 点であった。これらのうち、No. 1～8 は縄文時代のものと思われるが、No. 9 の石器については、第 4 号住居址の床面直上から出土しており、縄文時代のものとは形態にも差異が認められるので、住居址に伴うものと推定している。

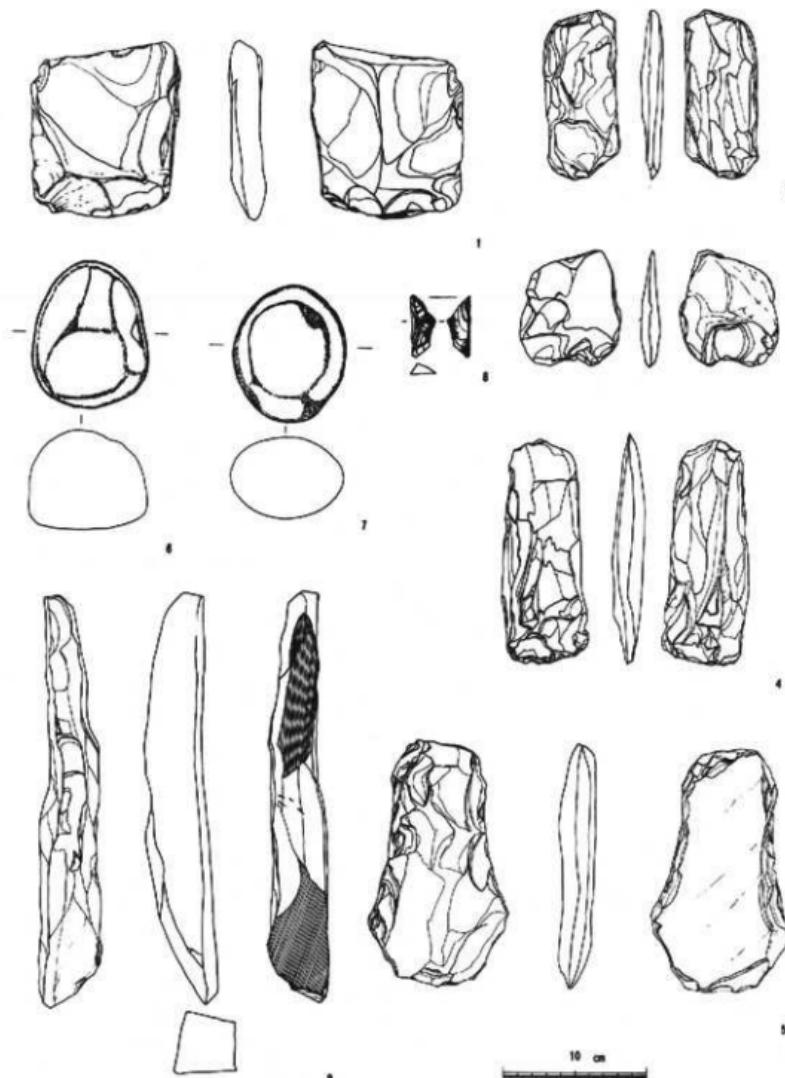
（喜多圭介・谷口 栄）



第35図 トレンチ出土の縄文式土器

第9表 住居址・トレンチ出土及び表採の石器

No.	石質	最長部(タテ×ヨコ)cm	器形名	内 容	備 考
1	安山岩	8・9×5・5	打製石斧	形状は、大きな剝離面を残し、方形を呈する。刃部は細部加工で調整されている。器厚はやや厚く、基部を欠損していると考えられる。	表採
2	粘板岩	12・2×5・2	打製石斧	形状は方形を呈し、やや荒い剝離によって整えられている。全体的に粗雑な作りで、器面の剝離面ははっきりしない。	3号住居址
3	粘板岩	8・3×7・1	打製石斧	形状は方形を呈し、基部と刃部の一部を欠損している。器面の剝離面は、はっきりせず、断面は薄い扁平を呈し崩れやすい。	3号住居址
4	粘板岩	16・4×6・2	打製石斧	形状は方形を呈し、調整剝離によって刃面部が整えられている。崩れやすく剝離面ははっきりしない。	3号住居址
5	安山岩	17・3×9・8	打製石斧	形状はいわゆる「菱形」を呈し、器厚に厚みがある。側面部は整えられており、刃部と共に細部加工が表裏から施されている。	A41~42 トレンチ
6	安山岩	10・4×7・8	磨 石	形状は橢円形を呈し、断面はやや扁平を呈する。兼底の方向などははっきりしない。	A35~38 トレンチ
7	安山岩	9・7×8・0	磨 石	形状は橢円形を呈し、器厚はやや丸みを帯びており、断面は半円形を呈する。器面の一部は入念に磨かれている。	5号住居址
8	黒雲石	4・4×1・6	スクレイパー	形状は不定形で、大きな剝離面を残し、一部に荒い細部加工の調整がみられる。また、一部に使用痕を留める。	2号住居址
9	花崗岩	29・1×4・4	不 明	形状は棒状で、大きな荒い剝離面取りをし、断面は台形を呈する。一方の器面には、使用痕が縦方向に認められた。先端部は鋭利に仕上げてある。	4号住居址



第 36 図 住居址・トレンチ出土及び表採の石器

第37図 堀之内原遺跡出土土器編年表

	壺形土器・須恵器	甕形土器	堀之内原 type
第Ⅰ期 <small>(第3号住居址)</small>			
第Ⅱ期 <small>(第5号住居址)</small>			
第Ⅲ期 <small>(第2号住居址)</small>			
第Ⅳ期 <small>(第4号住居址)</small>			

20 cm

V 発掘調査のまとめと若干の考察

1. 住居址について

今回の場之内原遺跡の調査は、幅10m、長さ 180mの範囲に限定されたものであるため、集落の様相を把握するまでには至らなかったが、竪穴住居址 6軒及び、ピット群を検出した。その内訳は、真間期Ⅰ、国分期Ⅴである。ピット群については、掘立柱遺構の重複したものと思われ、時期は不明である。

真間期の竪穴住居址としては、第3号住居址が、國分期の第5号・6号住居址にそれぞれ切られて検出された。

國分期のものは、第1号、2号、4号、5号、6号住居址の5軒である。

第10表 場之内原遺跡住居址一覧表

住居址番号	規模	プラン	主軸方向	時期	備考
第1号住居址	(南北)4・4m (東西)5・5m	隅丸方形	N-18°-E	國分期 (場之内原遺跡IV期)	周溝有り・カマド-北
第2号住居址	(南北)5・3m (東西)5・0m	隅丸方形	N-82°-E	國分期 (場之内原遺跡Ⅳ期)	周溝有り・カマド-東
第3号住居址	(南北)4・6m (東西)3・5m	隅丸方形	N-46°-W	真間期 (場之内原遺跡Ⅰ期)	カマド-北西
第4号住居址	(南北)5・5m (東西)4・9m	方形	N-3°-E	國分期 (場之内原遺跡Ⅳ期)	プラン-西側に凹み 周溝有り・カマド-北
第5号住居址	(南北)3・05m (東西)3・16m	方形	N-46°-W	國分期 (場之内原遺跡Ⅳ期)	カマド-北西
第6号住居址	(北)2・4m (南)2・7m (東)3・6m (西)4・05m	(不正)方形	N-59°-W	國分期 (場之内原遺跡Ⅲ期)	カマド-北西

2. 場之内原遺跡出土の土師器について

(1) 編年的位置付けについて

今回の調査によって検出された6軒の住居址から出土した土師器は、以下に述べる4期に区分されるものと思われる。

第Ⅰ期は、第3号住居址のものがそれにあたる。その内容は、底径の大きな壺、外面範削りの施された長胴甕、ナデによる整形が施された胴張り甕、及び、口縁部が「く」の字に外反し口唇部内面に稜を有するもので、胴外面には櫛齒状施文具によるかき目整形の後範磨きが施された胴張り甕で、構成されている。

第Ⅱ期は、第5号住居址・第6号住居址のもので、口唇部先端が尖り底径は大きく内面に放射線状の暗文を有する壺、外面範削りの施された長胴甕、口縁部が薄手で「く」の字状に外反し外面は継、内面は横方向にハケ目整形が施された長胴甕、ナデ整形が施された甕、小形で外面継、内面横方向にハケ目整形が施された甕、で構成されている。又、第6号住居址からは高壺の脚部と高台付須恵器が出土している。

第Ⅲ期は、第1号住居址・第2号住居址のもので、外面に斜めの範削り整形が施され、内

面に暗文を有し口唇部は丸味を帯び、或いは尖る环、内面に一条のくびれを有し底部は横に回転
箇削りが施された皿、外面縦方向・内面横方向にハケ目整形が施され薄手の口縁部が「く」の字
状に外反している甕、直立する口縁部がやや肥厚した小形の甕、によって構成されている。

第IV期は第4号住居址のもので、口唇部が丸味を帯び底径は縮小された环、丸味を帯びた口
縁部が一部玉縁状を呈し内面に放射線状・らせん状の暗文を有する内面黒色の环、同様に口唇
部が丸く一部玉縁状を呈し胴部は「く」の字状に屈曲した皿（外面に斜めの箇削りが施された
ものも認められる）、口縁部が肥厚化し外面は縦方向、内面は横方向にハケ目整形の施された長
胴甕で構成されている。またそのほかに、高台付の环や灰釉陶器を伴っている。

以上4期に区分して概要を述べて来たが、次にこれらの編年的位置付けを考えてみたい。

山梨県の土師器の編年研究は、末木健・坂本美夫両氏によって、前者は北巨摩郡下を中心に、
後者は東八代郡下を中心に、それぞれ精力的に進められている。その中で坂本は奈良期の土師
器を2期に、平安期のそれを7期に分類⁽¹⁾し、末木は平安期の土師器を5期⁽²⁾に分類している。
これらを基本に、4期に分類された堀之内原遺跡出土の土師器の編年位置付けを試みた。

第I期は、底径の大きな盤状の环を有する点に特徴がある。これは底部が完全な平底を呈し、
静止糸切後箇削りしたものも認められることから、坂本の晩期1—2式⁽³⁾に並行するものと思
われる。しかし、堀之内原遺跡第I期の环には外面縦横の箇磨き、内面に横・斜め・放射線状
の箇磨きが施されたものが存在し、これは晩期1—2式として取り上げられている环の中には
認められない。その点では、末木の第I期とした大豆生田遺跡第4号住居址⁽⁴⁾出土の、外面に
横方向の箇磨き、内面は横ナデ後放射線状暗文を施した环に類似している。従って、堀之内原
遺跡第I期は、坂本の晩期1—2式並行か、又はそれよりも若干新しい段階に位置付けられる
ものと考えておきたい。

第II期は、口唇部先端が尖り底径は大きく内面に放射線状の暗文を有する环が認められ、これ
は上平出1号住居址⁽⁵⁾の环に類似しており、甕も、ハケ目整形が施された長胴甕が存在するこ
とから、上平出1号住居址段階に並行するものと考えておきたい。

第III期は、环が、口唇部先端に丸味を帯びて外面に斜めの箇削りが施されるようになり、内
面の暗文も放射線状から花卉状を呈するようになる。皿も登場し、甕は、外面は縦、内面は横
にハケ目整形が施された長胴甕が主体となる。その口唇部は薄手である。これらは両ノ木神社
⁽⁶⁾前遺跡第5号住居址⁽⁷⁾段階に並行するものと思われる。

第IV期の特徴は、内面黒色土器の登場である。これらは内面に放射線状及びらせん状の暗文
を有する。又、削出高台付の环も出現する。皿は胴部が屈曲し、外面に箇削りの施されたもの
も認められ、甕は口縁部が肥厚化し、外面は縦・内面は横方向にハケ目整形の施されたもので
占められる。さらにこの時期は灰釉陶器を伴っている。これらは上平出遺跡第4号住居址⁽⁷⁾・
勝沼バイパス杭No.313地点第6号住居址⁽⁸⁾段階に並行するものと思われる。

- 註 (1) 坂本美夫・1975. 「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」『甲斐考古』12—2
- 註 (2) 末木 健・1976. 「中部地方の平安時代土師式土器編年の諸問題」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—須玉町地内』 山梨県教育委員会
- 註 (3) 註 (1)と同じ
- 註 (4) 註 (2)と同じ
- 註 (5) 末木 健・1975. 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一小淵沢町地内」 山梨県教育委員会
- 註 (6) 註 (1)と同じ
- 註 (7) 註 (5)と同じ
- 註 (8) 坂本美夫他・1974. 「勝沼バイパス道路建設に伴なう一古代甲斐国考古学調査」 山梨県教育委員会

(2) 地域的特色について

第6号住居址カマド内より潰れた状態で出土した胴張り甕(第32図、6)は、胎土に古代紫を呈した2~3mm大の粒子を多量に含有し、全体の色調が淡いはだ色及び古代紫を呈するもので、他の上部器、とりわけ半葉型の壺・甕と比較して、胎土・色調の点で著しく異なることが看取された。そこで、これがこの土器だけの特徴であるのか、それとも、量的にも時間的にもある程度のまとまりを有する一群の土器であるのか、検討するために、各住居址の出土遺物から色調・胎土に同様の特徴のある十器の抽出を試みた。その結果、第I期~第III期までの時期に渡って、また、壺・長胴甕・胴張り甕という各器形においてもその存在が認められた。以下各時期ごとにこれらの上器群(今、仮りに壺之内原 typeと呼ぶことにする)の内容、及びその量的変遷を概観してみたい。

第I期では、第3号住居址出土の壺形土器C 6類、C 7類がこれに類するものである。C 6類は、C 1~C 5類の壺と同様に底径の大きな盤状の壺であるが、外面に箒削りが施されている。C 7類は、小形で胴部がやや彎曲している。尖端は出来なかったが、胴部箒削りが施された長胴甕、ナデ整形による胴張り甕が認められる。壺・甕いずれも厚手である。これらの十器群の占める割合は、薄手で赤味を帯びた壺(所謂甲斐型の壺に共通する胎土を有するもの)

138点、壺之内原 type の壺4点である。次に甕では、薄手で、胎土に雲母・石英を含有し、内外面にハケ目整形の施された長胴甕(所謂甲斐型の甕と同系列のもの) 37点、甕形土器A 3類に属するもの——胎土に石英・砂粒を含有し、褐色を呈する胴部に箒削りが施された長胴甕36点、胎土に砂粒を含有し、色調が赤味を帯び、ナデ整形が施された長胴甕 123点、壺之内原 t-type の長胴甕 138点。甕形土器C 1類に属するもの——一色調が黄茶褐色を呈し、横ナデ整形が施された胴張り甕 128点。同C 2類に属するもの——口縁部が「く」の字状に外反し、口縁内面に稜を有する胴張り甕 123点である。

第Ⅱ期では、壠之内原 type に属する环は認められず、第5号住居址壠形土器A 4類の長胸甕、第6号住居址壠形土器C 3類の胸張り甕が、これに類するものである。これらの占める割合は、第5号住居址では、甲斐型の甕 86 点に対し壠之内原 type の甕 22 点、第3号住居址 C 2類の胸張り甕と同系列のもの 5 点である。第6号住居址では、甲斐型の甕 25 点、壠之内原 type の胸張り甕 23 点、同長胸甕 18 点、C 2類に属する胸張り甕 15 点である。

第Ⅲ期では、実測できなかったが、わずかに胸張り甕が認められた。これが占める割合は、第1号住居址では、甲斐型の甕 368点に対し 4 点、第2号住居址では、甲斐型の甕 213点に対し 11 点である。

第Ⅳ期では、壠之内原 type の土器は全く認められなかった。

以上、壠之内原 type と仮称した土器群について、各期に渡って概観した結果、本遺跡において、第Ⅰ期では环・長胸甕・胸張り甕、第Ⅱ期では長胸甕・胸張り甕、第Ⅲ期では胸張り甕がそれぞれ認められ、ある程度の時間的広がりと量的なまとまりを持つことが明らかになった。しかし、この壠之内原 type の土器群が出土遺物中に占める割合をパーセンテージで示すと、第Ⅰ期では环が 3%、甕 23%、第Ⅱ期では（甕のみ）、第5号住居址で 20%、第6号住居址で 28%、第Ⅲ期（甕のみ）では第1号住居址 1%、第2号住居址 5%、といった程度で、各時期において主體的な存在ではなく、むしろ他の土器（甲斐型の环・甕）を補完するような存在と思われる。とは言え、この壠之内原 type の土器群は、平安期以降に頗るな位置付けがなされている「甲斐型」の环と甕とはその色調・胎土・整形において明らかに別個のものとして認識すべきものと思われる。

そこで、これら一群の土器を（これまで仮称してきたように）「壠之内原 type」と呼ぶことを、改めて提唱し、その内容的な問題提起を図りたいと思うのである。現在までのところ、断片的ではあるが、山梨県東部においてこれら壠之内原 type の土器が認められている遺跡は、10ヶ所を数える。⁽¹⁾ 今後、調査が進むにつれてその数は増えるものと思われる。筆者は、この壠之内原 type の土器群を当地域におけるローカルな存在として理解し、甲斐国内における都留郡の地域的特質の解明に向けての有望な突破口として位置付けたいと考えている。⁽²⁾

尚、この壠之内原 type の土器群の発生及び消滅の歴史的内容については、別の機会に述べたいと思う。

註 (1) 堀内 真・都留考古学会第 14 回学習会発表要旨による。

註 (2) このような意味では「都留郡型」という名称のほうがより適切と思われるが、現在までのところ、当地域における調査事例は少なく、都留郡全城にまでおしなべて議論できるものか否か確証を得るに至っていない。そこで、とりあえず、壠之内原遺跡において最初に確認された属性として、「壠之内原 type」という名称に留めておくこととする。

おわりに

今回、堀之内原遺跡の発掘調査によって、奈良・平安時代の堅穴住居址6軒、および堀立柱遺構を検出し、当時の生活の様相を探る上で貴重な資料を得た。また、各住居址から出土した遺物、特に土師器は、当地域における編年表作成に向けての第1歩を踏み出すことを可能にし、中でも、甲斐型の壺・甕とは胎土・色調・整形を異なる一群の土器が発見されて、地域的特色も明らかに見受けられた。「堀之内原 t Y P e」と命名したこの土器群については、今後なお一層検討を加える余地を残すものの、当地域におけるローカルなものであり、上体的に存在するのではなく、他の土器（甲斐型の壺・甕）を補完するような存在と考えられる。この土器群の発生および消滅についての歴史的内容の解明は今後の課題である。先学諸氏の御批判・御教授を願う。

最後に、調査に参加された地元小形山地区老人クラブ及び婦人会の方々をはじめ、調査や遺物整理にあたって献身的な協力を賜わった日本大学考古学研究会・都留文科大学考古学研究会の会員諸氏に御礼を申し上げると同時に、日本道路公団笛子トンネル工事事務所の方々の御協力に感謝申し上げる。

図 版



(1) 堀之内原遺跡遠景（北西方向より）

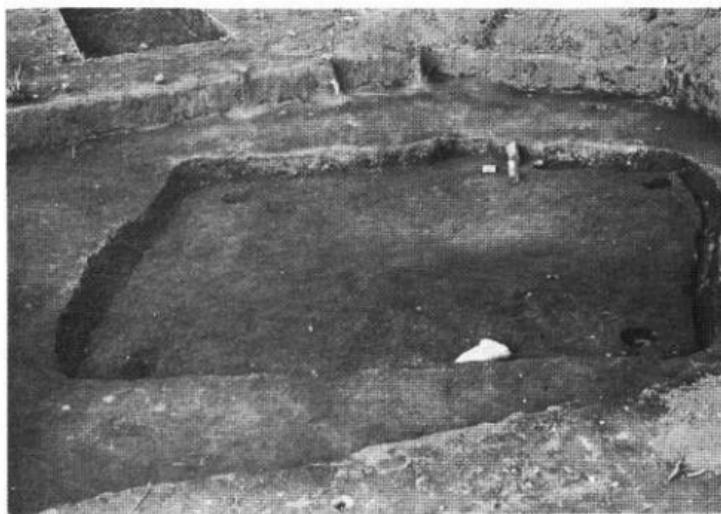


(2) 堀之内原遺跡近景（南西方向より）

図版 2



(1) 堀之内原遺跡遠景（西方向より）

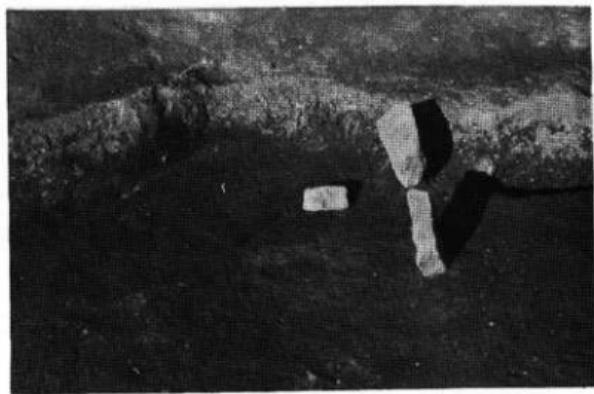


(2) 第 1 号 住 居 址

図版 3



(1) 第 1 号住居址調査風景



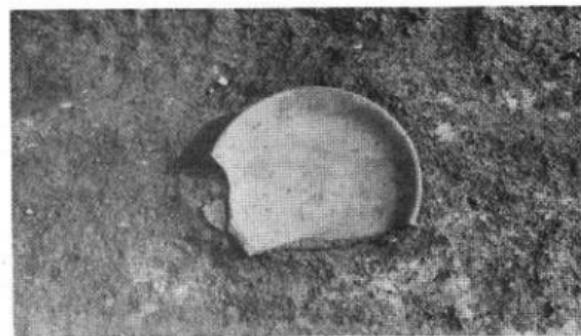
(2) 第 1 号住居址 カマド

図版 4

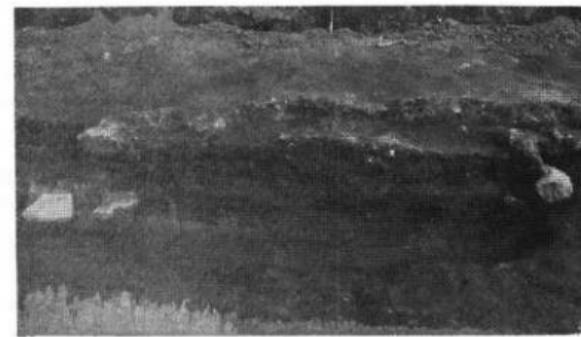
(1) 第2号住居址
遺物出土状態



(2) 第2号住居址
遺物出土状態



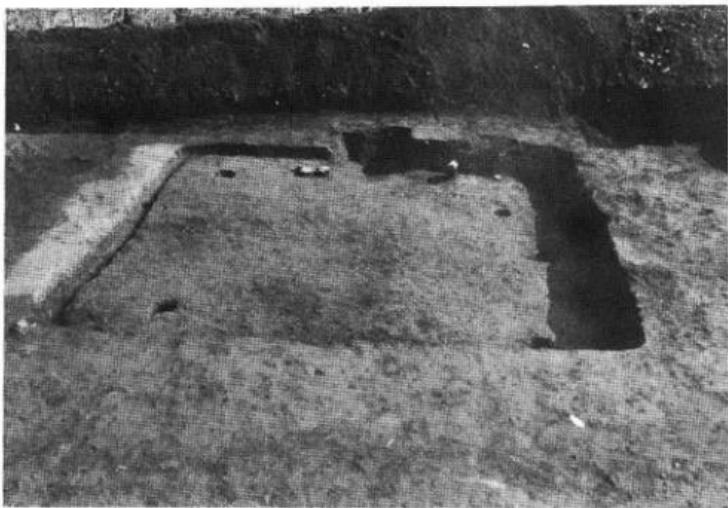
(3) 第2号住居址
カマド



図版 5



(1) 第 2 号住居址



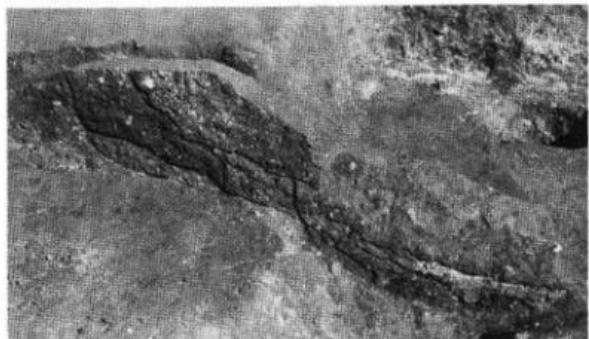
(2) 第 2 号住居址 (掘り方)

図版 6

(1) 第3号住居址
カマド



(2) 第3号住居址
カマド(セク
ション)



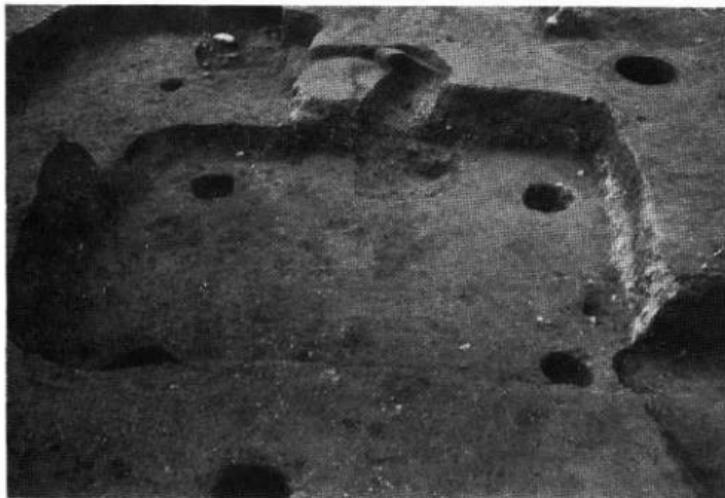
(3) 第3号住居址
カマド(掘り
方)



图版 7



(1) 第 3 号 住居址



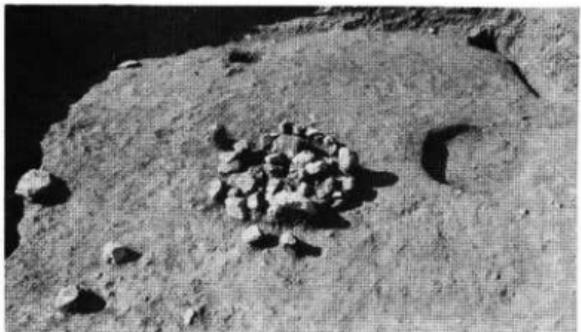
(2) 第 3 号 住居址 (掘り方)

図版8

(1) 第4号住居址
遺物出土状態



(2) 第4号住居址
床面上集石



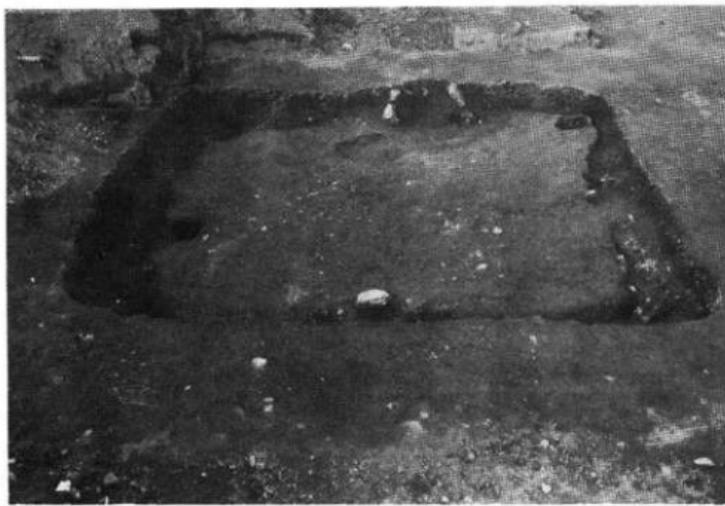
(3) 第4号住居址
カマド



图版 9



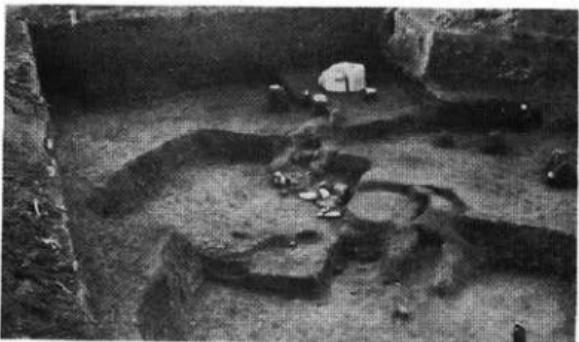
(1) 第 4 号住居址



(2) 第 4 号住居址 (掘り方)

図版10

(1) 第5号住居址
(手前側が第3号
住居址)



(2) 第5号住居址
カマド



(3) 第5号住居址
カマド





(1) 第5号住居址



(2) 第5号住居址(掘り方)

図版12

(1) 第6号住居址
遺物出土状態



(2) 第6号住居址
カマド

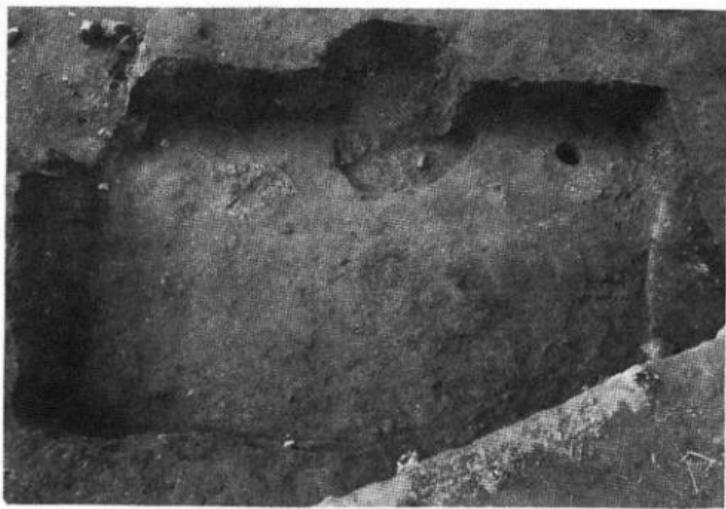


(3) 第6号住居址
カマド (掘り
方)



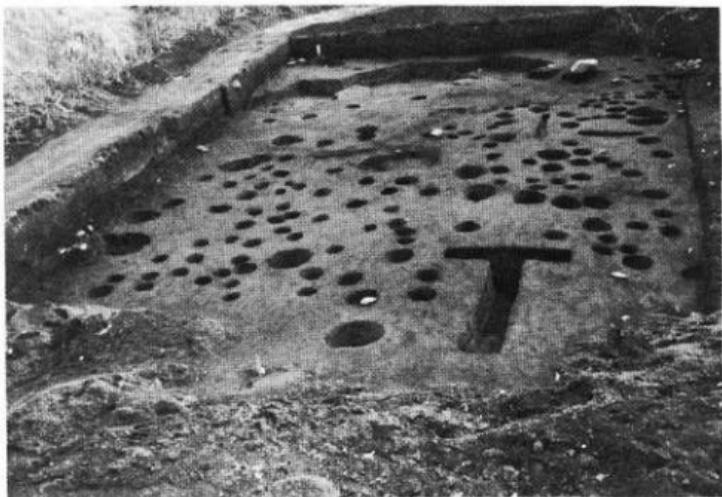


(1) 第6号住居址



(2) 第6号住居址 (掘り方)

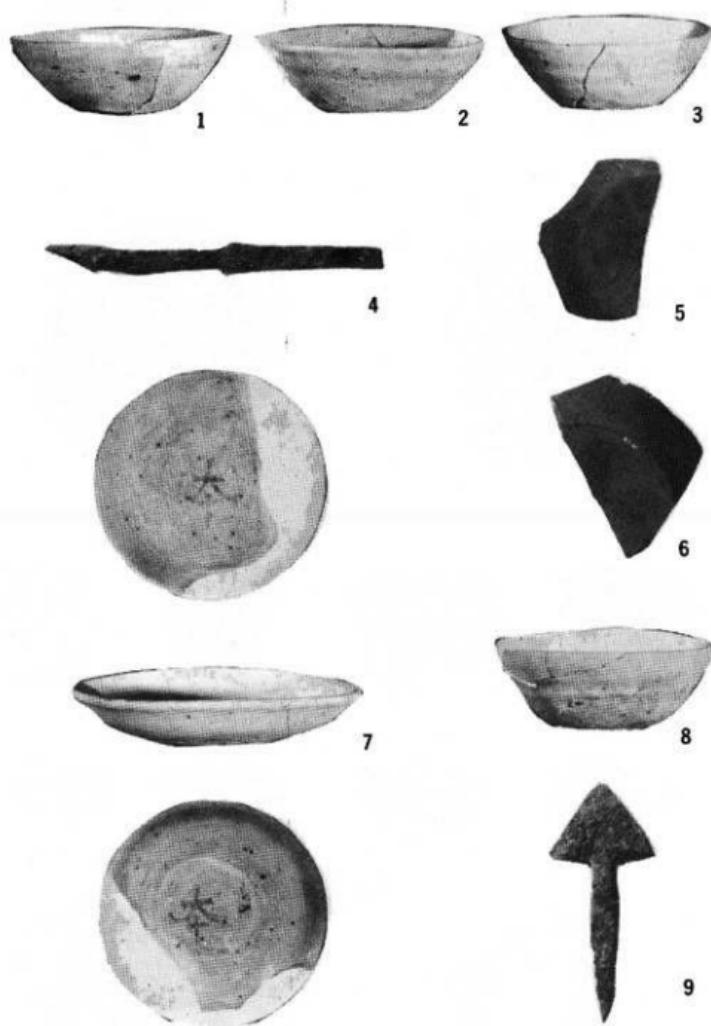
図版14



(1) ピット群全景(北方向より)

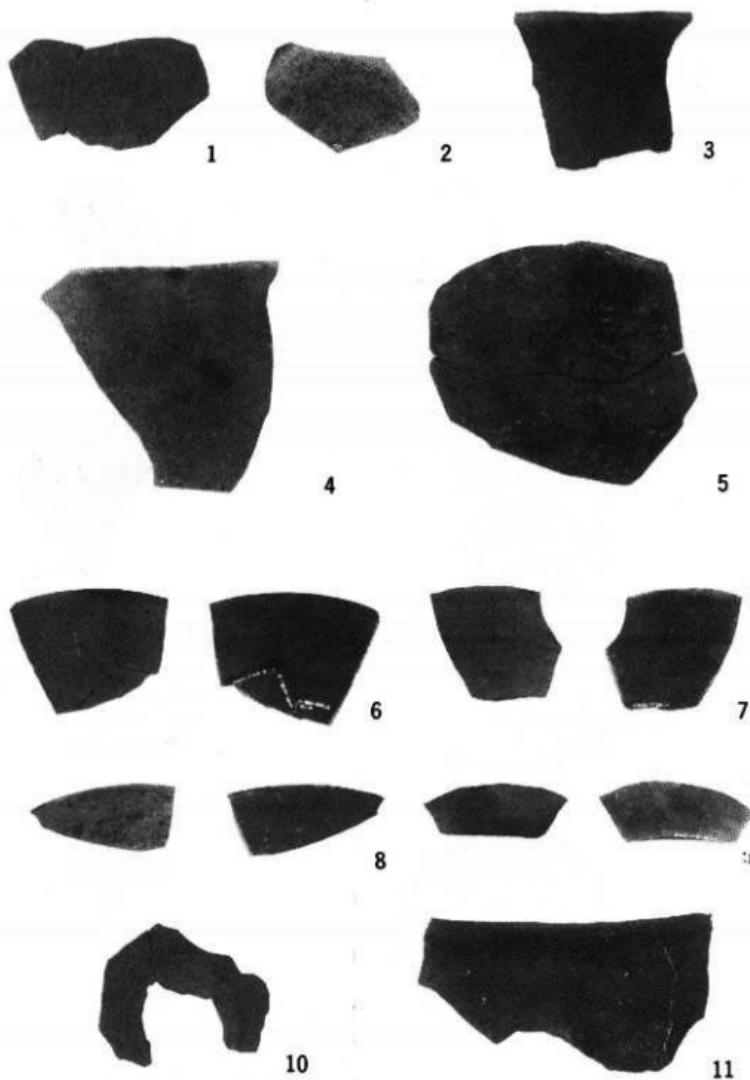


(2) ピット群全景(南東方向より)



第1号・2号住居址出土遺物
(1~6は第1号住居址 7~9は第2号住居址)

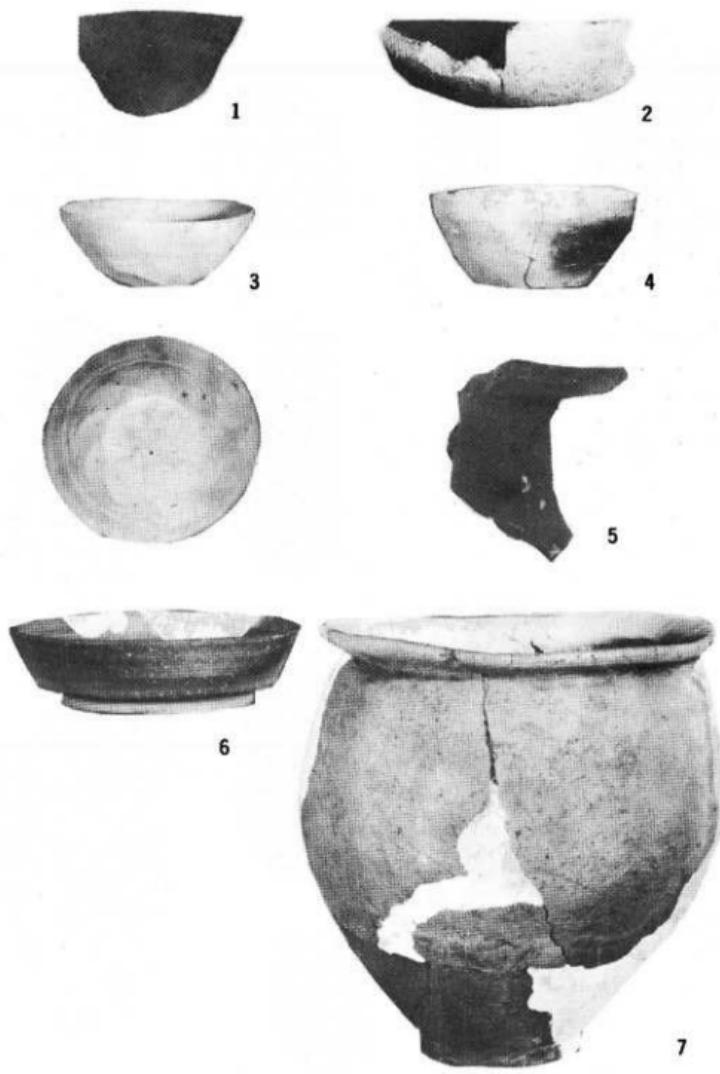
図版16



第3号・4号住居址出土遺

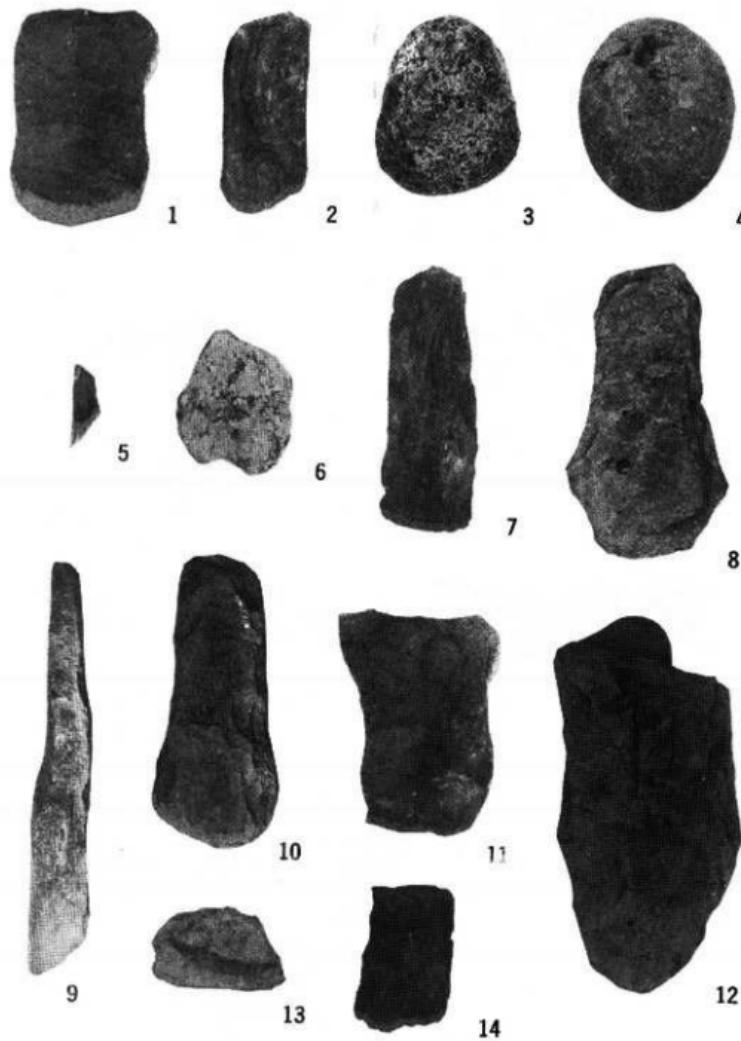
(1~5は第3号住居址 6~11は第4号)

図版17



(1・2は第3号住居址
3は第4号住居址 4は第5号住居址
5～7は第6号住居址)

図版18



表探・ビット群出土の石器



調査参加者

中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う
堀之内原遺跡発掘調査報告書

昭和 55 年 3 月 20 日 印 刷

昭和 55 年 3 月 31 日 発 行

編集 都留市教育委員会

発行 都留市教育委員会

日本道路公团東京第二建設局

印 刷 レ オ ン プ リ ン ト

